

Sugar Jelly

Amane Katagiri

Sugar Jelly

片桐 天音

もくじ

廃墟、曖昧、私とあなた	白子まり（十須藤りと）
ペパーミント・バスタイム	綿紬ことこ
ミックスサンド・ベイキング	白子まり（十須藤りと） 綿紬ことこ
あとがき	

廃墟、曖昧、私とあなた

片桐天音

海水や淡水にいた頃のクラゲは、ふわふわで曖昧なものだったと聞いています。そうですね……少なくとも、わざわざナイフで切り刻む必要はなかったのでしょうか。クラゲは全て絶滅してしまいました。私たちも、いつか絶滅するのでしょうか？

＊

高架の終点からさらに少し北上すると、中心市街地らしき廃墟に突き当たった。もうこれ以上線路は続いていないようだ。

たぶんここが今日の目的地ということになるのだろう。さっきの駅の周りのほうが栄えていたような気もするけど、あそこは建物自体がだっ広くて何だか探索する気が起きない。

「あれ？ 街なのに、駅が見当たらないね」

「たぶん、この地下に入ってるのよ。さっきもそうだったでしょ？」

りとが、そうだっけ、と首を傾げた。

高架に沿って歩いている途中にも、途中の駅の周りに

はいくつか打ち棄てられた施設があった。しかし、駅から少し離れただけで、商業施設どころか家すらない荒野が広がっているのにはびっくりする。

どうして離れ離れに街を作って、鉄道で繋ぐような真似をしたのかしら。暇を持て余した官僚のダーツゲームか何か？

「ここからは線路が通ってないわ。どこかに廃バスが残っていてもおかしくなさそうね」

「あの橋の上とかで、バスが走ってたのかも」

あっちにも橋があるみたい、と言ったりとが指差す先には大きな陸橋が架かっている。橋の真ん中から石か何かでできた塔が飛び出している不思議なデザインだ。

双眼鏡でよく見ると、街区から街区へ橋が渡されているけれど、車がすれ違うには幅が足りないようにも感じる。バス専用路なのかしら。

「そうかもね。じゃあ、少し休んでから探索を——」

「まり。ここにもくらげがいるみたい！」

屋根の下にあるベンチに腰掛けようとする、それを遮るようになりとが楽しげな声を上げた。その声に釣られ

て下を覗き込むと、ベンチの影に張り付くぬめぬめした動きが目に入ってしまう。

「え……きゃあっ！」

うええ。片足で地面を蹴ってベンチから離れる。休ませるはずだった身体が、こんなに俊敏に動くとは思わなかった。

「きゃあ、だって。まりの悲鳴、可愛いね」

「馬鹿にしてるの？」

随分歩いてきたはずなのに、りとは全く疲れていないかのようにはいしゃいでいる。

北に進めば進むほど、建物の隅だとかベンチの下とかに蠢く子犬サイズの謎動物（りとが言うには「くらげ」）が増えてきた気がする。

子犬と書く则可愛く感じるけれど、見た目はヌルヌルでテカテカだし、脚がたくさん生えている。生理的な嫌悪感が走ってどうも好きになれない。

もともと彼女のセンスが独特（ときどき微妙）なのは分かっていたことだけど、こういう触手持ちまでカバーしているとは思わなかった。

「はあ、何だか楽しそうね」

道行く先々にある建物の影に数匹単位で群がっている怪物は、視力に無理をさせれば図鑑に載っていた絶滅したクラゲの姿に見えないこともない。

でも、図鑑で見ただのクラゲよりも肉が厚そうで、頭が大きくて、色も不透明な暗い赤色でとても気味が悪い。傘の中央には外周に向かって不規則に黒い模様が入っていて、そういう警告色じみた取り合わせも最悪だ。

「よく見ると結構可愛いよ。頭のあたりとか。白子たちとあんまり変わらなくない？」

「あの子たちは、もっとすべすべしてて可愛いわよ！」

って、よりにもよってその警告色が気に入ってるの？ こいつは明らかにクラゲじゃないと思うんだけど。そもそも、陸に上がっている時点でクラゲであることを疑うべきじゃない？

「そのクラゲっぽい謎モンスターが、コレクターに高く売れるなら私だって大喜びなんだけど」

「まりはお金の話ばかりだね。久しぶりに二人で旅行だっていうのに」

りとが冗談めかして肩をすくめる。彼女は旅行のつもりだったらしいけど、一方私は初めから仕事のつもりだ。旅行ならもっとロマンチックで落ち着けるような場所に行きたいわ。

「ふたりは嫌？」

「仲間外れは好きじゃないの」

とは言え、ここはこういう遠征にあんまり来ない。インドアタイプなのよね。

「ちょっと、りと。今回の目的、ちゃんと分かってる？」

「家賃の工面でしょ？ 分かっているって。このくらげを持って帰ればペットショップとかに買ってもらえるかも」

「どうやって持って帰るつもり？」

「それは考えてないけど」

はあ。即答するりとに、私は嫌な顔をしてみせた。

「そういう奔放なところ、ますますあなたが好きになっちゃいそうだわ！」

＊

橋に上がるのは意外と簡単だった。街の上に通路がも

う一つ作られているような感じで道が広がっているみたい。階段を上がってから四方に進むと、途中に架かっている橋から街の様子を一望できる。

橋を渡った先にもまだ道があるらしい。街全体を探索するのになんか掛かるのか考えると、ちょっと憂鬱だ。

りとが左右に回って上から写真を撮る。確かに、報告書に載せたらウケが良さそう。もうクラゲの写真もいっぱい撮ってるし、これなら追加報酬もあるかもね。

「本当にだっ広い街だね。もっとコンパクトに作ってくれてもよかったのに」

「土地がいっぱいあるからでしょうね。羨ましいわ」

「昔の人は豊富な資源を持っていたのに、使い方が下手だったんだね」

無計画に木なんて植えたらこうなるに決まっているよ、と続けた。りとが下手と称したのは、ぼこぼこに膨れ上がった道路の舗装のことだろう。

中央分離帯で区切られた大きな道路には街路樹が植えられていたらしい。古びた舗装には一定間隔で大きな亀裂が入ってしまったって、もはや使い物にならなくなっていた。

ることを示す矢印だけが残されている。

かろうじて男女が並んだマークや人が走り去るマークが残っているせいで、まるで異国に来たみたい。ここにはフランス語でも教わっておけばよかったわ。

「文字のない街、ねえ。にわかには信じがたいけど」

わざわざここを選んだってことは、きっと何かの産業があったと思うんだけど。大きな工場もないし、輸送の拠点でもなさそうだし、農業やスローライフでも流行ってたのかしら？

「荒野に急に街が生えるなんて、超常現象の類かも」

「もしそうなら、スクーパーズもびっくりね」

エイリアンは文字がない都市を襲うのかしら？

橋の真ん中を過ぎて緩い坂を下りていく。手帳に「ヴィオール橋↓街区ことこ・街区り」と書き込んだ。こうやって勝手な命名をするの、探検家っぽくて少しだけテンションが上がるかも。

「なに、まり？」

「……なんでもないわ」

りとは秘密だけだね。

その亀裂を覆うように雑草や小さな木が生えていて、またそこから小さな亀裂が入り始めている。最後には舗装がめくれ上がって、この街を全部覆ってしまうのだろう。街路樹を植えれば自然を守ったことになるのかしら？

「そもそも、なんでこんなところに街を作ったんだろう」

「あら、クイズ？ そうね……あの大きな山が炭鉱だったとか？」

「でも、そんなに人の手が入っているようには見えないよね。そもそも石炭があったのかどうか……」

軽く歩いてみたところ、道が縦横に整然と区切られているし、それなりに計画的に造られた都市であることが窺える。

多くの人が住めるように、早くから画一的な住居が密集して建てられてきたみたいだし、まさかここまで衰退するとは誰も思わなかったんじゃないだろうか。

この街にはもう一つ大きな謎がある。

看板、ポスター、案内板……街のあらゆる文字が消えてしまっているせいで、ここがどこなのかも把握できなくなっているのだ。銀色の案内板には、前方に何かがあ

陸橋を二つか三つ渡って、まだ木々に侵食されていない比較的小な場所に出た。そこら中がレンガ風のタイルで舗装されていて、歩くとブーツがコツコツと硬い音を立てる。

辺りを見渡してみると、ここが二階建てのシャッター街に設けられた中庭だと分かる。真ん中に横たわっている茶色く変色した太いパイプは、おそらく遊具だったものだろう。プラスチックにしては長く残っている。あつち滑り台かしら。

「この街、本当に『おたから』がないわねえ」

橋を渡ったり戻ったりしながら地図を作る。その中で家賃を工面できそうなレトロ・パーツの類を集めなければならぬ。でも、まだ目ぼしいものがクラゲくらいしかない。これが大昔の特撮キャラクターの全自動フィギュアなら、コレクターも挙って買いに来てくれるだろうけど。

地図や報告書の提出で防衛隊から貰えるお金は、毎日クレードを買ったら無くなるくらいのお小遣いレベルだし、このままじゃ帰れないわ。

「これ、本当に生きてるのかな？」

りとがこれ、と指差す先には――

「ひゃあっ！」

「まり、慣れないねえ」

いつの間にか足元にクラゲが近づいていた。ぷるぷると少し震えている。流石に飛んでかわすほどの反応はしなくなったけど、やっぱりこういうのって、そうすぐに慣れるものじゃないでしょう？

びっくりホラーは苦手なのよ！

「分かってたなら早く言ってよね！」

辺りが薄暗くなるにつれて、明らかにクラゲの行動範囲が広がっている。やっぱり、陽に当たると表面が乾いちゃうのかしら。不意に襲ってくることはないだろうけど、飛びかかってきたクラゲと熱い口づけを交わすだけはやめておきたいところね。

そう思いながら、クラゲから距離を取るために私は一歩後ずさった。

「あ、まり」

と、りとが何か言うより先に甲高い音がした。一瞬だっ

「どこかに大きなロケットとか、月の石でも落ちてないかしら」

「くらげばかりだね。飽きてきちゃったかも」

日陰を覗くとほぼ必ずクラゲがいる。初めこそ、石を持ち上げてダンゴムシでも探す子供みたいにはしゃいでいたりとも、段々と身体をかがめる回数を減らして歩みを早めていた。

一方の私は、そろそろ慣れてきたかも、と思った辺りで不意打ちを食らうので実はあんまり落ち着けずにいる。陽が傾いてきて少し寒くなってきた。思ったよりも北に来てしまったのかもしれないわ。

りとがクラゲから目を離しているのは、壁に描かれたグラフィティが増えたせいもあるかもしれない。即席のスプレーアートを見かけては写真を撮っている。

こんな落書きは、もう原宿ではめったに見かけなくなつた。デザインも何かのレトロゲーで見たことがある不思議な模様だし。ノスタルジーってやつかしら？

それにしても、シャッターと見ればお絵かきだなんてここはスラムか何か？

たけど、きょむ、と鳴ったようにも聞こえる。私の足先からブーツ越しに嫌な感覚が伝わってくるのと一緒に、ぐちゃ、と湿った音も耳を襲う。

「り、りと。分かっているわよね？ 今、私に何が起きているのか、驚かないように伝えてちょうだい」

「えーとね、まり。もう一匹のくらげが、足の下に……」
もう十分よ！ 慌てて踏み抜いたクラゲから足をどけると、自重でザクッ、とさらにゼラチン質が裂けてしまう。身体が半分こになったクラゲはじたばたする様子もない。ぐに、と身体が地面に沿って広がったかと思うと、ドロリとした赤い液体になってすっかり原型を留めなくなってしまうた。

「あ、クラゲが……」

お気に入りのブーツが汚れてしまった。でも、クラゲを踏んじやったのは私だし。クラゲはたぶん死んでしまったし。

まあ、足跡が残らなかつただけ良かったかもしれない。こういう痕跡が下手に防衛隊に見つかってしまったら、また無用の破壊行為として警告されてしまうかもしれない

のだ。

「くらげって、陸でも案外柔らかいんだね」

「ブーツにネバネバが残っちゃった……あら？　これ、何かしら？」

よく見ると、崩壊したクラゲから黒っぽい粒のようなものがばらばらと零れ落ちていた。

「これ、文字だよ。日本語じゃない？」

りとが液化したクラゲを避けて内容物を器用に掬い取った。覗き込んでみると、私達が知っている文字の限りでは「竹」と近い形をしている。不思議なクラゲの内臓は、軽く指の間で擦られただけで音を立ててパリパリと崩れてしまった。

私もそれに倣って遺骸の隅から黒い塊をつまみ上げてみる。力が強かったのか、すぐに潰れて指に黒い跡が残ってしまった。これは「波」という文字だったらしい。

「ほら。こっちは看板のペンキで、そっちは本のインクだよ。たぶん」

「器用なものね」

謎の深い生き物だわ。このクラゲは身体の中に文字を

溜め込む性質があるのかしら。文字が栄養なのかも。まるでことこみたいね。

「あんまり文字に統一性がないのね」

日本語だけじゃなくて、アルファベットやテレビで見た外国の映像に映っていたような文字も混じっている。色も大きさもバラバラだし、あんまりセンスの良いクラゲじゃないわ。

「私たちだって、配給日の直前は残り物ごちゃまぜ特製サンドを作るじゃない。それと一緒にだよ」

「この街のクラゲも、食糧不足ってことかしら。貧しいのって、ほんと嫌になるわ！」

イワシとフルーツ缶の取り合わせって、本当に最悪よ。それからりとは「ちょっとスケボーしてくるね」と言って、遊具の周りや段差の横にあるスロープを駆け回り始めた。流石に狭いからエンジン使わないみたい。

ここに来たときからちよっとうずうずしてると思ったけど、そういうことだったのね。ここまでずっと凸凹で車輪なんて使える場所 wasn't なかったもの。

車輪とタイヤが擦れる小気味いい音を聞きながら、私

はクラゲゼリーの前にしゃがみこんだ。

「すごく良いロケーションね。あんたも、ずっとここを見てたの？」

生きてるって、なんなのかしら。さっきまで蠢いていたはずのどろどろの粘液に、そんなことを思う。

＊

辺りはすっかり暗くなってしまった。

影に潜んで動かなかったクラゲの群れもすっかり自由に動き出し、夜の空気が一帯を支配する。そろそろ夜露を凌げるような場所を見つけないと、闇に飲まれて死んでしまいそうだわ。

それにしても、霧が強い。少し歩くと顔がほんのり湿るといふか、妙にべとべとする。お肌が悪くて仕方がないわ。服も湿って気持ちが悪いし、本当に海辺をずっと歩いているみたい。

中心部からはいぶ北に来了。これ以上進んでも野営に適した場所はないだろうと思いつつ、わずかな期待に二人とも足を止めることはない。

そもそも、クラゲが奪っていくのは文字くらいだろうから、いざとなったらどこでテントを張ってもいいだろうというほんのりした安心感もあった。

「まり、向こうに明かりが見えるよ」

「あら、ほんとね。電気が通っているのかしら」

そんな中で訪れた突然の変化に、私は少し面食らう。放棄された街の中で、陽が落ちても街灯が機能しないのは当然のことだ。そんな中で宿を探している私たちが、都合よく電気の通っているエリアに辿り着くなんて！　嬉しさと同時に、都合の良いすぎる流れに対しての不安が入り混じるのを止められない。

そんなことを考えながら坂を降り切ると、目の前には不思議な光景が広がっていた。な、なによこれ……。

「すごいわ！　海の底みたい！」

辺り一面が真っ青な街灯で照らされている。濃い霧も相まって、そこら中の空気が真っ青に染まっているみたい。テーマパークか何かなの？

「建物も密集してるみたいだね」

「これ、昔の寄宿舎でしょう？　やっぱり炭鉱でもあつ

たのかしら」

海底に煌々と輝く電灯と並んで、五階建てくらいの建物がいくつか並んでいる。それぞれの建物には白い文字で番号が振られていて、まさに管理社会って感じね！みんなまとめてどこかに引っ越したのかもしれないわ。

「このあたりなら、くらげの群れも来ないみたいだよ」

言われてみると、足取りが軽くなったというか、クラゲの群れをまたいで歩くことが無くなった気がする。彼らの目（そもそも目はどこにあるのかしら）にはマグライイトが珍しいものに映るらしく、さっきまではクラゲのショーをスポットライトで照らしている気分だった。

不思議ね。クラゲは暖色が好きなのかしら？

軽くなった足に任せて、私はアスファルトの上でステップを踏んだ。

「ああ、私、海辺のホテルに泊まるのが夢だったの！この際、もう海底のホテルでも良いわ！」

＊

海の底ホテルから適当な部屋を探して忍び込む。客室

ズとすぐく似てるもの。どうしてこの街から出ようとならないのかはよく分からないけど。

りとの案は、突然変異したクラゲの末裔。北の方は放射線が強いという話をここから聞いたのだという。そうだとしたら、白子たちともちょっと近い生き物ってことになるわね。認めたくないけど。

とりあえず、明日の朝食からお互いの好物を一品を賭けてみることにした。私は合成グレープのシロップ漬のピン詰めを、りとは缶詰の魚肉ソーセージをベッドのフレームの上に置く。

外からの青い光に照らされて、缶詰のパッケージに描かれた笑顔の魚（おそらくマグロ）のおかしらが、私を睨むように輝いた。

「りと、ごめんね。クラゲ潰しちゃって」

「え、どうして？」

私の声に反応して、りとが寝袋の中でがさがさ動く音がする。寝袋の中で微睡みながら、私は寝言のように呟いた。

「気に入ってたみたいだったから。可愛いって言ってた

は狭いけど、寝袋を敷いて寝るには十分すぎるくらいに綺麗だった。中には木製のベッドが一つ置いてあって（もちろんマットレスは外してあって使い物にならないけど）、さらに洗面台も付いている。昔は室内まで水道が通っていたらしい。

私たちは寢床の準備をしながら、手帳とかカメラをクラゲに見つからないようにリュックの底へ押し込んだ。きつとこまでクラゲは来ないと思うけど、クラゲをいっぱい踏んでクラゲワインを作る夢でも見ちゃいそうだわ。

眠る前に、私たちはいくつか確認と推理をした。

とりあえず、この辺りにいるクラゲは文字を餌にしているらしい。あらゆる看板から文字が消えたり薄れているのはそのせいだろう。ただの餌ではなく、身体に溜め込んで何かに役立てているのかもしれないという話もした。彼らが食べるのは、言語を問わずより抽象化された文字だけで、矢印とかピクトグラムの類は食べないようだ。あくまで文字の情報に注目しているのかも。

私の案は、スクーパーズが置いていった平和的な侵略兵器。文化的なものを欲しがるっていうのは、スクーパー

じゃない」

「んー……可愛いものをざくざく切るのって、割と面白くない？」

なんかゲームみたいだし、と続けるりと。この子がレトロゲー狂だったのを、今やっと思ひ出したわ。彼女の目にはロールプレイング・ゲームのモンスターにでも映っていたのかしら。

反省して損したかも。

「まあ、とりあえず、ここを連れてこなくてよかったわね」

「そうだね。本を食べられちゃったらショックで倒れちゃいそうだし」

私も、白子たちを食べちゃうクラゲがいたら絶対に家を出たくないもの。そんなことを考えながら、いつの間にか私は眠りについていた。

＊

「まり……ねえ、まり！地下への入り口、見つけちゃったかも」

揺れる身体と名前を呼ぶ声に目を擦ると、りとがスケボーを抱えて私を目覚めさせようとしているところだった。窓の外はまだ深い夜なのに、りとはすっかり探検装備に着替えている。

「あのね、寝不足はお肌に良くないのよ……」

寝ぼけながら彼女を落ち着かせようとするけれど、未知の発見に興奮している私たちは誰にも止められないって、お互いによく分かっている。私は快眠を早々に諦めて、最低限の装備を整えてから部屋を出ることにした。

それに、一人で地下なんか潜って行方不明になったら私だって困っちゃうもの。

「う……寒いわね」

「そう？ 走り回れば温まるよ」

「夜中にいきなり起こされた身にもなってちょうだい」

素直に部屋に戻ってもう一枚、薄いコートを羽織ることにした。

「こんな寒い夜によく出かける気になれるわよね、いつも」

「冷たい空気で肌がびりびりすると、生きてるって感じがしない？」

「クラゲが水の中で生きてるよ！」

「え、ええ……そうね」

振り返って嬉しそうな顔をするりと。壮大な眺めに一瞬言葉に詰まってしまう。

私たちを迎えたのは、直径五メートルくらいの大きな円形の水槽だった。上から青い照明で照らされて、辺り一帯をほのかに冷たい光が覆っている。目に刺さるような光を放つ地上の街灯とは違って、身体を包み込むような優しい刺激に少し安心する。

りとの赤いヘルメットにもその水色が差して不思議な色に輝いている。駆け寄るりとを眺めながら、私も歩いて水槽に近づいていく。

初めて見るクラゲは、ふわふわで曖昧だ。陸のクラゲよりも小さくて、傘は大きいやつでも二十センチメートルくらい。光をよく通すその身体はいつ絶滅してもおかしくないほどに儚げで、ずっと見ていると壊れてしまいくそう。

泳いでいるクラゲは、傘を伸ばしたり縮めたりしながら上へ進んでいくけれど、その動きで身体がばらばらに

「スケボー乗りの宿命か何かなの？」

寒い冬はコートにマフラーを装備して、肩を縮めて歩くくらいしかやり過ごす方法を知らないわ。生きてるって感じからはほど遠い。

羨ましい限りね。

五分くらい歩いたところに、りとのいう「地下への入り口」がぽっかりと口を開けていた。

「入るの？ ここを？」

「入るの。ここを」

りとは私の返事を待たずにさっさと地面へ潜っていく。もう、分かったわよ！

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

りとがはしごを下りきってコツコツ歩く音を聞きながら、私も金属のはしごをキューキュー言わせながら足早に下りていく。地下は外よりも暖かいようだ。手を突いたコンクリートむき出しの床は、少しひんやりしている。

「すごいよ、まり！」

ごうんごうんという機械音と共に、目の前が明るくなった。

なってはしまわないかと心配になる。

今日は目に刺激が強い一日だわ。帰ったら目薬を差さないとな。

「あら、これは……りと、ちょっと見て」

ふと床に目を下ろすと、青い照明をよく反射する白い紙が散らばっているのに気付いた。

「なんだろう？ 日記かな」

この街で初めて見るまともな文字かもしれない。水槽のそばに散乱していた手記のページには、おおよそこういうことが書かれていた。

スクーパーズから文化を防衛するため、我々は自律的に文化を内包して保護する機構についての研究を開始した。素早く移動させるか、強靱な戦闘力を与えるか、あるいは擬態してスクーパーズに見つからないようにすればよいだろう。

クラゲの遺伝子改良が進み、陸上で生活できる種も徐々に増えていた。ここから文化保護機構となりうる種をい

くつか選別していこうと思う。水中で生活するものも、知能を改善して司令塔として使えることが明らかになってきた。

文字を飲み込んだクラゲから文章を再構成するのは非常に難しいということが分かってきた。十数年越しに研究の根幹に関わる大きな問題が発覚するとは、ひどい夢でも見ているのか？ その直後、暴走したクラゲが大学を襲う事故が多発して多くの資料が失われた。たちどころに我々の立場は悪化し、すぐに研究は中止となってしまった。

街中にクラゲが解き放たれ、人間が文化的な生活を送るのが難しくなってきた。この手記も運が悪ければもうクラゲの胃の中という可能性もあるだろう。駆除も間に合わない。我々は、取り返しのつかない研究に加担していたらしい。

水槽の生命維持機能を停止すれば、文化保護機構への

指令も途絶えるだろう。しかし、コントロールを失ったクラゲが、そのまま自然消滅するのがあるいは暴走して街を破壊し尽くすかはまだ分かっていない。市民はその答えを出すより先に、この街を捨てることになった。tear-downの際は細心の注意を払ってほしい。

文化を壊して守ったことにしようだなんて、昔の人が考えることは本当に分らないわ。かなり苦労していたんだけど、結局逆襲されちゃってるみたいだし。

「あんなクラゲ、一体一体ナイフで切っていけばすぐ解決したんじゃない？ 平和主義者だったのかしら」

「昔はすごく速くて、もっと強かったのかもね」

あんな大きなクラゲが、赤黒い傘を素早く揺らして体当たりでもしてきたら、気絶しちゃうかも。

「ねえ。あなたたちが、ここの人たちをみんな追い出しちゃったの？」

水槽の壁に手を置いて軽く撫でると、不規則に泳いでいたクラゲの何匹かが手に寄ってふわふわと舞い始めた。意思があるような、ないような。りとも同じように手で

クラゲを操りながら、それを穏やかな目で眺めている。

二人とも未知の発見に対する驚きや喜びを味わえずにいた。もちろん、どちらも賭けに外れたせいではない。

「で、どうする？ りと。壊しちゃう？」

水槽の横には大きなスイッチが設置されていて、レバーを下げるためには赤いプラスチックのロックを取り除かなければならない。ロックには「危険・生命維持装置メインスイッチ」と書かれている。クラゲへの給餌や水槽の温度調節のスイッチなのだろう。

「やめところよ。今はもう、誰にも迷惑を掛けていないんだし」

「同感ね。同じクラゲとは思えないわ。こんなに弱々しくて儂げに見えるんだもの」

秘密の記された紙束を軽くまとめて、元の場所に戻す。これは報告書に載せないでこよう。

*

水槽の周りをもう一度よく探索してみたけど、手記以外には危険もなければ珍しそうなアイテムも見当たらない

かった。今回は収穫なしかしら。

当分、クレープは控えなきゃ。残念ね。

「じゃあ、軽く報告をまとめてから戻りましょうよ。あ、その前に夜食が良いかしら？」

私がそう呼びかけると、しんびてき……といつもよりの間の抜けた声の下から聞こえてくる。ふと視線を下ろすと、りとが座り込んで銀色のロング缶に口を付けていた。青い照明が反射してキラキラと輝いている。

「ちょっと、りと！ 外にいる時はお酒は飲まないでって言ったわよね」

冷たい缶とは対照的な、りとの紅潮した顔が私を見上げる。

「別にいいじゃない。もう安全って分かったんだし」

私が呆れた顔をしていると、楽しげな声で「攻略完了！」とVサインしてみせる。右手には缶を持ったままだ。

そのまま視線を交わして十秒くらい。りとはばつが悪そうな表情で私の脚に寄りかかって小さくにゃあ、と鳴いた。ここに猫はいないわよ。りとなら、疲れているのかしら？

「いきなり敵が襲ってきたらどうするの？ 私だけじゃ倒せないわ」

「だからさっきは飲まなかったじゃん」

ふてくされた子供みたいにゆらゆら缶を揺らす様子を見てみると、怒りがふつふつと湧いてきた。なんだって、私はこんな辺鄙な水族館に来てまで酔っぱらいの相手をしなきゃならないのかしら！ほんと、ばかみたい！

「りと、あんたね！ いつか言おうと思ってたんだけど、そういう安いお酒をがぶがぶ飲むのはやめたほうがいいと思うわ」

「なんでー？ コスパ最強じゃない」

りとのお気に入り、支給品の中でも一番大量生産されていて、一番労働者に人気があって、一番安い酒なのだ。彼女がこういうのが好きなのは（支給品が配られるたびに最初に手を付けているから）知っていたし、今更お酒の好みに文句を言うつもりもなかった。

ただ、今日は疲れも相まって本当にイライラしてしまう。急に安心しちゃって、私だって混乱してるの。

「お酒っていうのはね、もっと高くて美味しいのをちび

ちび飲むからいいんじゃない」

「ぶどうジュースをグラスで飲んだって酔えないもん」

「えーと……すっごく昔の話を、いきなり持ち出さないでくれる？ 思い出すのに時間がかかったから」

なんなのかしら。中学か高校の頃のおしゃまな私の話を蒸し返してくるとは思わなかった！ 分かっている。お互いの趣味に文句を付け始めるといつだって泥沼だ。ええ……そうだわ。素面の私が一番落ち着かなきゃね。

ぐいぐいと軽く膝でりとを頬を押してみる。りとは突かれるたびに小さくうめくような笑い声を上げて、その度に大きな缶がぐらぐらと不安定に揺れる。

「アルコールの作用は気分が大事で……あー、もういい！ それ、私にもよこして」

「え、飲むの？」

私がりと隣の座り込むと、彼女はくすくすと笑いながら首を傾げてそう訊いた。包みを開けた食べかけの魚肉ソーセージをこちらに差し出してくる。

その声からは、疑問や驚きというよりは、悪い仲間ができたぞとでもいう嬉しさのようなものを感じる。

でも、それは違うのよ。お酒っていうのは、アルコールに身体を任せてしまうから酔っちゃうの。酔うつもり

がなきゃそんなに酔わないし、酔いたいと思っていれば酔ってしまう。私は正気を保ったまま、りととのアルコール摂取量を減らしてあげるつもりなの。

どう？ すごいでしょ。りとを介抱しなきゃならない重圧を背負ったままで、私が酔うわけがないもの。

「だって、放っておいたらぜんぶ、飲む気でしょ？」

「うん。ぜんぶ、飲む気だよ。よく分かったね、まり」

りとがオウム返しでぜんぶ、と私と同じように強調してみせる。受け取った缶を口に付けて、ぐいと一口。うう……この飲みやすい感じが、人間を墮落させる気がして受け付けないのよね。

「そうね。キャパオーバーで歩けなくなったあなたの介抱、何回もやってるせいかしら」

「うんうん。まりー、いつもありがとねー……」

そう言うてから、りとは甘えるように私に寄り掛かる。手の甲に当たる彼女の頬が熱くって、本当に猫でも飼ってる気分よ。

「まりって、私のこと大好きだもんね」

「んなっ！ 別に、好きなんじゃないわよ！」

慌てて横を向くと、とろんとしたりと熱を帯びた視線とぶつかってしまう。顔が近いわ。顔の半分だけ青い光で照らされて、何だか趣味の悪いカラーリングね。半身だけ吸血鬼にでも支配されちゃったみたい。ハロウィン・パーティーはまだ先よ？

「うふふ、冗談だよ」

「もう、冗談ならもっと冗談らしく……」

あ、あら？ 何だか光の境界がぼやけてきたような……

*

頭がふらつとして、気付いたら私もりととの頭にもたれかかっていた。

「あー、だめね。私も、疲れてるんだったわ」

疲れは酔いの原因になるのよ。ぼそぼそと自分に言い聞かせてからではもう遅かった。「まり、重いよー」という声が下から聞こえて慌てて頭を起こしてみるけれど、クラグのふわふわとか、りととの髪の毛のふわふわとか、気持ち

いいものが私の意識を包み込んでいく。

起き上がった頭をゆっくり倒してりとこつ、と頭を合わせると、今度は収まりが良かったらしく機嫌の良い鼻歌が聞こえてくる。私のほうが少し身長が大きいから（ほんの五センチくらいね）、まるでお店の真ん中にあるロボ・スピーカーに寄りかかって音楽を聴いているみたい。「昔のホテルには、くらげがいたのかな？　こんなに穏やかで、落ちていて……」

クラゲを見つめるとの睨みが次第に閉じていくのが見える。彼女の脳裏には、どんなクラゲが映っているだろう。青く光って、水槽をぐるぐる回り続けるだけの存在。そんなの、原宿にはいなかったわ。

この世界の端っこみたいな場所で、クラゲは何を考えているのかしら。ここで私は、何と向き合わなきゃいけないのかしら。原宿の夜を闊歩しても入り込めないような思考に、今なら没入できる気がした。

もしも地球がここを残して消えてしまったら、私はりと世界の終わりまで二人きりだ。こんな綺麗な隠れ家、スクーパーズには見つけられたくないけれど、いつかは

見つかってしまっただろう。そう考えると、この場所をここに知られるのさえ、ひどく怖くなってきた。

もし、ここにいるのがりととことこだったら。私は破壊を願うのかしら？　PARKで一人、もう意味のないレア・アイテムに囲まれて。

私が何も答えずにいると、そのまま静かな時間が流れていく。ポンプの動く音が耳に障るくらいには静かで、お互いの鼓動さえも共有できてしまいそうだ。

「ね、まり——」

と、頭を起こしたりとが私の耳に吹きかけるように囁いた。

「いや。やめて」

吐息まで熱を帯びたその声が、私の頭にじわりと広がって思考が止まりそうになる。身体がほのかに温かくなるのを意識しながら、私は嫌な予感を拭えずに彼女の言葉を遮ってしまう。

「——ちょっとだけ、一回だけしょ？」

「い・や・よ！」

先っちょだけだからーと言いながら、りとが缶を持つ

たまま私の首に腕を回す。りと腕は思ったよりも冷たくって、私の体温まで上がっているのを否が応でも感じてしまう。ああ、私の大事な友人はもう随分と（私もだいぶきているけれど）曖昧になっているみたいね。だから外ではお酒を飲まないでって言うのに！

「下品なことを言うのはやめて！　それに……ここが怒るわよ？」

「うん。だからちゃんと内緒にしてね、まり」

りとが指に人差し指を当ててウィンクをした。三人でいつも一緒にやってきたのに、二人だけの秘密だなんて……浮気みたいなものじゃない？　ここが悲しそうな顔をしているのを想像して、嫌になる。とにかく私、隠し事とかそういうの苦手なんだけど。

作った秘密は、消せないんだもの。

「私ね、仲間外れは嫌なのよ。りとも分かるでしょ？　りとだって、私がことごと、その……こういうことをしてたら、嫌でしょ？」

「んー、別に気にしないかも。だってまり、分かりやすいもん」

「な、何よそれっ！」

まるで考えていることが全部見透かしているようなことを言う。まあ確かに、感情をいつも隠せずにいる自覚はあるけれど、だからって……。

分かりやすいのは私だけで、実は私の知らない間に二人が私に言えないようなことをしているんじゃないかって、たまに心配になる。二人の間に何も秘密がないとして、私を中心に三角関係ができていたとしても、それはそれで面倒そうだけれど。

「あ、分かった！　まり……ことごと、えっちしたいんだ？　ふふ、面白い」

「どうしてそうなるのよ！　お酒に飲まれて適当なこと言うのやめてってば」

「まり、私のこときらいなの……？」

酔ったりとが繰り返す脈絡のない話も、いつもは適当に聞き流せば済むはずだけど、今回は答え一つで簡単に真操が危うくなってしまうと思うと一人で緊張してしまう。じっと私を見つめる彼女の視線に耐えきれなくなつて、私はそろそろと目を逸らす。

「きれいなじゃ、ないわ。一緒に暮らしてるんだもの。りとのことも好きだし、ことだって好きよ」

「じゃあいいじゃん。ほら、もっと飲んで気持ちよくなる？」

「だから、ことが——んむっ！」

りとが目を離れた隙に、いとも簡単に私の唇を奪っていた。唇の熱が私の顔まで熱くする。忘れられないこの感覚は、やっぱりことには内緒の気持ちになってしまふのだろう。

いつの間にか彼女は膝立ちになって私を押し倒すような格好になっていた。りとは重力に任せて私の口をとろとろでいっぱいにして——ってこれ、お酒だわ！ 流し込まれるアルコールの波にむせてしまいそうになるけれど、今咳き込んでしまったら私の顔までびしょ濡れになるのは避けられないので何とか飲み干した。

私、そんなにお酒に強くないんだけど！

「あー……待って、りと。分かったから！ まず、服を脱いで」

りとの肩に手を置いて落ち着かせようとするけれど、一層揺れる視界の中で彼女は私を見てにやにやと笑っている。

DISCUSSION TOPICS

- ・エイリアンの襲撃により世界の経済が崩壊した場合、性欲を満たすために廃墟で「レスセックス」をしますか？
- ・北方への探索に同行せずに留守番したことこの選択は正しかったでしょうか？
- ・クラゲが外を自由に歩き回る中、地下室でりとの押しに負けたまりの判断は良いと言えるでしょうか？
- ・もし貴方が、撮影した写真とレア・アイテムを自由に持ち帰れるが、報酬が少ない実験的な部隊に徴兵されたらどう思いますか？
- ・もし貴方が仲良くしていた二人が付き合ったとして、貴方たち三人の仲を保つことにどういった意味がありますか？

る。何よ、私の顔に何か付いてるっていうの？

「まりって本当にえっちだね。うふ、ふふふ」

「ち、違うわよ！ 帰りの服が無くなったら困るからに決まってるでしょ！」

ああ、もう！ 二人で探検なんてもうこりこりよ！

＊

「りとちゃんまりちゃん。報告書に書けないことはしないほうがいいよ……？」

「そうかもね。でも、可愛いクラゲの平穏と静寂を守れたから、朝はとっても気分が良かったの！ ね、りと？」

「ふふ。これからはちゃんと気を付けなきゃね、まり」

EXERCISES

- ・信念、モラル、お酒の好みが違う人達と友達になってみましょう。
- ・お店を開いて、よそには無いオリジナルクラゲを販売してみましょう。
- ・家の近所、街、廃墟で「レスセックスごっこ」をしてみよう。
- ・貴方の胸の内や、自分以外の友達同士の関係性に対する不安を綴る日記をつけてみましょう。

ペパーミント・バスタイム

片桐天音

私が誰かと仲良くしても、あなたとの仲が変わるわけじゃないの。あなたが彼女と仲良くしても、私との仲は変わらずにいてほしいな。私たちを包む幸せは、独占したり所有したりできないものだから。欲張って手のひらで掬い取ろうとしても、溢れて全部こぼれてしまう。

どうすれば、三人で生きていけるかな？

＊

私の一日は、PARKの開店準備から始まる。

りとちゃんとまりちゃんは、今日も原宿の外へ調査に出かけている。今回は北の方に行くって言っていた。だから、昨日から私は一人でお店を回している。ハンガーラックを動かして、床のモップ掛けをして、レジのセッティングまでこなしているのだ。

誰もいないPARKは、いつもより広くて静かだ。

慣れないはたき掃除を頑張ってみても、棚の上まで届かない。背伸びする鏡越しの私は、その寂しい広さを持て余しているようにも見える。そんな私の雰囲気を感じ取った白子ちゃんたちが、時折周りを跳ねて心配してく

れるけど、逆にふらついたちっぽけな私の孤独さを意識させられてしまう。

「何かいいもの、持って帰ってきてくれるといいなあ」

調査隊員として給料や物資の配給を受けられるようになった今でも、お金の問題（それも、来月の家賃という短期的な問題！）はいまだに私たちを悩ませている。

そんなかつかつの生活を支える重要な活動の一つが、廃墟に散らばる貴重な「おたから」の収集だ。許可を受ければそのままお店に陳列できるから、今となっては重要な収入源になっていた。

本当は白子ちゃんたちだけじゃなくて、たくさんのお客がそこらじゅうでダンスを披露してくれてもいいくらい。でも当然、いつも通りキャッシュドロワーの中は寒々しいままだ。

小鳥ちゃんと白子ちゃんたちに囲まれながら商品の整理をする。今一番売れてる商品は、シッポちゃんというもここのマスコットだ。手のひらサイズで手触りがいいキーホルダー付きのぬいぐるみ。持ち運ぶうちに気に入ってくれたお客さんが、家に並べて飾るために一ダー

スくらい買っていくこともあるのでなかなか悔れない。

昨日も何個か売れたから、その分を入り口のシッポちゃんグッズコーナーに補充しておいた。

その後に、小鳥ちゃんの刺繍が入ったポロシャツを、こっそりとまりちゃんのオリジナルプリントTシャツと入れ替える。自分がデザインした商品がたくさん売れると夕飯がちょっと豪華になるのだ。本当は壁にかかったシヨップ・ロゴのシャツと交換したかったんだけど、踏み台がないと手が届かないのでやめた。

そうして何度か商品の補充と配置の調整を繰り返すうちに、開店時間が近づいてきた。最終チェックとして、指で作った枠を覗き込みながら全体的なバランスを確認する。

店内をぐるりと見回していると、まりちゃんのシャツが視界に入っふと私の手が止まる。

「まりちゃん、上手くやってるかな」

ここ数週間は二人がいなくて少しだけ気が楽になっていた。どうしてだろう？ 休憩せずに続けていた作業から急に解放されたような、穏やかだけど手持ち無沙汰で退屈な感覚だ。

「どうして、かな？」

どうして——だなんて言ってみせるけど、本当はなぜなのがよく分かっていた。

そうだ。まりちゃんの様子がちょっとおかしいからだ。このことが、最近ずっと頭から離れない。りとちゃんと距離が変わった……というか、避けている。明らかに。

三人で夕食を食べる時には、あんまり軽口を叩かなくなった。逆にりとちゃんがお出かけしてる時は、私相手に一日の出来事を感情たっぷり喋ってくれるのだ。まるで黙っていた時間を取り戻すようにして。

まりちゃんが私を誘ってお出かけする回数も増えたけど、私にべったりというわけでもなくって。たぶん、りとちゃんと二人にならないように努めてるんだと思う。

何より一番大きいのは、一緒にお風呂に入ってくれなくなっただことだ。これまでは、お風呂が狭いからとか、今日はシャワーの日だからとか、もっともらしい理由を付けて断っていたんだけど、最近は単に「気分じゃないの」としか言わなくなった。

でも、まりちゃんがりとちゃんを嫌いになったわけ

はないのもよく分かってる。りとちゃんと私が二人でお風呂に入るのをなんとなく嫌がってるみたいだし、まりちゃんがよく気にしている「りとちゃんの『気まぐれシャンプー』リスト」の記録も続いているみたい。

「二人とも、私のために争わないで……なんて」

私に構ってくれるのはありがたいことだけど、私を真ん中にしてけんかになったら嫌だなと思う。もともと言い争いをしやすい二人だから、りとちゃんがちょっと仕掛けたら簡単にけんかになってしまうだろう。

最近のまりちゃんは、私のことをりとちゃんから逃げる隠れ蓑にしている……と思う。そういう後ろめたさのせいで、きつとまりちゃんはいつもよりけんかに油を注いでしまうはずだ。そういう時に私は言い返したりできないけど、りとちゃんならますます燃え上がってしまうだろう。

原宿の空はずっと変わらないままなのに、私たちは段々と変わっていく。そんなことを日々感じている。これがただのちょっと長い夕焼けだったらどんなにいいだろう。三人の中で誰かと誰かが内緒で仲良しになったり、段々

と疎遠になったり、いつの間にか敵同士になっていた。それってすごく嫌なことだ。

私は三人でずっと仲良くしたいのに。三人で一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、ぐっすり眠って。

「今日だって、きつと——」

くるり、とプリーツスカートを翻しながら、ハートのこもこポケットに手をつっ込んだ。

「——きつと、昨日もりとちゃんに好き放題されてたんだろうなあ……はあ」

レジに入って、真っ白な壁に寄りかかる。もし、ここにいるのがまりちゃんだったら。彼女はりとちゃんと私のことを考えてくれるでしょうか？ P A R Kで一人、何も言わないレア・アイテムに囲まれて。

＊

私が二人の「秘密」を初めて目撃したのは、一ヶ月くらい前のことだ。

あの日の夜、私は一人で本を読んでいた。

私が一人の時間を過ごしている時は、たいいてい二人も

それぞれで好きなことをしている。りとちゃんはそっとP A R Kを抜け出して、カラスプレーとスケボーで原宿を駆けに行く。まりちゃんはオリジナルの型紙を片手に、新しい服のデザインにミシンを走らせる。そうやって、いつも平和に夜が過ぎていく。

ただ、その日は少しだけ違った。

普段はそれぞれの趣味を楽しむ二人も、ごくたまにだけ一緒に映画を観ることがある。探索で見つけたディスクの鑑賞は、りとちゃんとまりちゃんが一緒に楽しめる数少ない娯楽の一つだ。

実はもう、原宿の中には受け身で楽しめるような娯楽があまり残っていない。昔の音楽や映像はほとんど失われてしまったし、残っているのは本や雑誌くらいかな。

内容さえ気にしなければ、昔のテレビ番組を非公式に録画したビデオ・アーカイブなら原宿のあちこちで入手できる。ただ、どれも画質が悪い上につまらない（「日本サイコー！」みたいな映像ばかり！）ので、残念だけどフロアのテレビを飾る素材にしかない。

そんな中で回収するビデオの「おたから」はとても魅

力的だ。観終わったらコピーしてお店に並べておくこともできる。

とはいえ、私は夜に映画を観ると途中で眠くなっちゃうから、レイトショーはいつも二人だけのイベントだ。

その日の私は、前々から読んでいたフランス語の教科書を読み終えて、日記を書いてから席を立った。二人におやすみを言うために。

リビングのドアに手を掛けて、部屋の中をそっと覗く。すると、テレビの光に照らされた二人の不思議な光景が目に入った。

二人は映画を見ていたはずなのに、いつの間にか身体を絡めてソファに倒れ込んでいる。

「——。まり、——？」

「——。——？　　わよ！」

初めは二人とも寝ているのかと思ったけど、ひそひそとした話し声が聞こえてくるので起きてみたい。穏やかなりとちゃんの口調に対して、まりちゃんは怒ったような強い調子で答えている。

倒れたのは不意のアクシデントだったらしく、まりちゃんは身体を起こしてソファに座り直した。それに合わせて、りともちゃんも起き上がってまりちゃんにもたれかかる。

今日はまりちゃんが苦手なホラー映画の日だから、驚いた拍子に倒れ込んだのだったのかも。怒ったふりで恥ずかしいのをごまかすのはいつものことだし、ホラー映画をすっかり怖がるのだっていつも通りだ。

映画の時間を邪魔しないように、私は部屋に一步踏み込んだ足をそっと後ろに戻した。耳をそばだけると、二人だけの秘密の会話が聞こえてくる。

「やめて、りと。まだ映画が終わってないわ」

「ふふ。まり、映画なんか観てないじゃん」

どうやら図星だったらしく、そんなこと……と、まりちゃんが言いよどむ。確かに、りとちゃんとまりちゃんは映画なんてそっちのけで、じっと視線を交わしているように見える。二人の顔はいつもよりずっと近くて、妖しげな雰囲気包まれていた。

どうしてこんなことになってるんだろう？ 私は少し困惑しながら、ソファの周りやテーブルを見回した。

テーブルの上には、銀色の缶や緑色のびんが何本も無

造作に置かれている。りとちゃんが飲む缶のお酒はいつもと同じくらいの量だけど、まりちゃんはいつもより多く飲んでいるみたい。

まりちゃんはお酒にもおしやれを求めているので、買ってくるのは可愛らしいびんの甘いお酒ばかり。でも、配給と一緒に届く缶入りの合成酒はその正反対だ。大量生産の無骨な味とデザインはまりちゃんが受け付けないので、だいたりとちゃんが飲んでいる。

私はあんまりお酒は好きじゃない。日記に書くことが減っちゃいそうな気がして。

「ちゃんと観るわよ……怖いシーンが終わったら、ね」

「もうクライマックスだから、ずっと怖いシーンだよ？」

さっきから、りとちゃんもまりちゃんも全くテレビを見ていない。酔った二人はつまらない——もしかしたら本当に怖いかもしれないけど——映画には全く興味がないようだった。

映画に合わせて、暗く明るく照らされる二人の顔。じっと見つめていると、そのキスの距離から目が離せなくなる。

「ひゃっ！ やっぱり観るの、やめようかしら……」

まりちゃんだけは、時々大きな音に反応して身体をびくっと揺らしている。りとちゃんはそんなまりちゃんを見て、どんな顔をしているのかな。

「うん、無理しなくていいと思う。まり、怖い映画苦手なのに、観たがりだもんね」

「今、密かに流行ってるみたいだったから、ちょっとね」

「じゃあ明日、ことごと一緒にまた観ようか」

そう言って、りとちゃんはリモコンで映画を止めて、テレビの電源も切ってしまった。待機状態を示す、小さな赤いランプが点灯する。

リビングを照らしていた唯一の明かりが消えて、目が慣れるまでは何も見えなくなってしまう。

BGMが止んですっかり静かになった部屋の中で、二人はずっと黙っている。どちらも映画を観ていなかったし、もう眠くておしゃべりする気も起きないのかも。

じゃあ、そろそろおやすみを言おうかな……としたところで、口を開いたのはりとちゃんだった。

「まりと映画観るの、私は好きだよ」

「あら、急にどうしたの？」

「うんうん。こうやって、まりとくつつけるし」

りとちゃんはそう言って、のそりと身体を動かしてみせた。徐々に目が慣れ始めて、まりちゃんの首に腕を回したのが分かる。

「だから、やめてってば。こんなの、ことここに見られたら説明できないわよ？」

「ことごと一緒にする？ って言えがいいじゃん」

名前を呼ばれて一瞬びくっとしてしまふ。気付かれるような音は立てずにすんだけど……私が、一緒に……？

「呆れた。あなた、飲みすぎてるの？」

「まりだって。いつもよりすごく顔、赤いよ」

「安酒のがぶ飲みと比べないでほしいわね。私のはいい酔い方をするお酒なの。りとのは違うわ」

「ふふっ、それ面白いね、まり。そんなの、飲んじゃえば全部同じだよ」

りとちゃんは右腕をまりちゃんの首に回したまま、左手でテーブルの上に広がる缶の一つを手取る。見せつけるようにゆっくりと引き寄せてから、ぐい、と残った

中身を飲み干した。

静かに缶を置いてから、またまりちゃんの目を見つめる。

「だって今日のまり、ふわふわしてる。隙だらけだよ」

そう言って、りとちゃんはまりちゃんを抱き寄せる。キスの距離がぐっと詰められて、そのまま――

「だから、ことが起きてるかも――んむっ!」

――そのまま、唇が重なった。まりちゃんの反応は一瞬遅れて、りとちゃんの急な動きをそのまま受け入れることになってしまう。

それからまりとちゃんの思うがままだ。静かなリビングに響く水っぱい音と、しゅるしゅるとした衣擦れに、暗闇で揺れる二人の影がソファに倒れて重なった。

ひとしきりもぞもぞと動いた後に、りとちゃんがまりちゃんの耳に口を寄せる。

「か、勝手にすれば? もう、知らないわよ」

りとちゃんは何と言ったかよく聞こえなかったけど、こそこそと、触るよ? と耳元で囁いたらしい。

たっぷり酔ったまりちゃんは、もう流れされるがまま。お酒には強くないはずなのに、今日はホラー映画の恐怖を

ようだった。

逃げ切った私は、後ろ手で寝室のドアを締めてそのまま寄りかかる。緊張の糸が切れて、急に辺りの静けさが私を包み込んだ。

ばくばくとした心臓の音で、私が確かにりとちゃんとまりちゃんの新たな関係を目撃してしまったことを意識させられる。

「りとちゃん……今の、何だったの?」

おやすみどころか、顔を合わせることもできなかった。

次の日。こんな朝に限って、目はぱっちり覚めている。私は初めて二度寝したふりで朝を迎えることになった。どんな顔をしてテーブルにつけばいいのか分からなかったから。食事当番じゃなくて良かった。

「おはよう、ここ」

りとちゃんが、二度寝から覚めた起き抜けの私をじつと見つめる。少し沈黙が流れてから「ご飯、できてるよ」と笑いかけた。昨日のことについて話してくれるつもりはないみたい。

紛らわすためにたくさん飲んでしまったのかもしれない。

「んっ……うう、ふあっ……」

まりちゃんは押し殺すような声を漏らしながら、映画の時とは全然違う跳ね方でりとちゃんの責めに応えている。「まり、びくびくしてる。気持ち良い?」

「ち、ちが……映画の音にびっくりしてるのよ……っ!」

「ふふっ……まり、可愛いね」

りとちゃんに抱かれるまりちゃんは、とってもえっちなだった。スタイルのいいまりちゃんが身体をくねらせている様子を見ると、何だか不思議な気分になる。

ごくっ。

息が荒い身体の動きに任せて、思わず少しだけ手があらぬ方向に動いてしまう。少しだけ、ふらりと動いた手がドアを離れて、自由になった金具がぎいと音を立てる。

ま、まずい……!!

「あれ、ここ。いるの?」

私はそろそろと足音を立てないようにして、急いでその場を立ち去る。見つからないか心配で急ぎ足になってしまうけど、りとちゃんは追いかけてくるつもりはない

まりちゃんも二人の秘密については教えてくれそうにもなかったけど、りとちゃんとは少し様子が違った。

「ひゃっ!」

「どうしたの、まり? ちょっと手がぶつただけだよ」

「え、ええ、そうよね……」

まりちゃんは、昨夜のことをよく覚えていないみたいだった。まりちゃんはもととお酒に強くないから、飲みすぎると記憶が曖昧になることがある。

昨日のことも、ぼんやりとした思い出の中に沈んでしまっているのかも。りとちゃんと恥ずかしいことをしている夢でも見ていたんじゃないかと思っているのかもしれない。

「あ……今日のお風呂、私は一人で入るわね」

こうして、みんなが作る三角形がちょっとだけ歪んでいく。あの日から、まりちゃんは少し変わってしまったのだ。

*

変わったのは、二人だけじゃない。私も変わりつつある。

あれから、りとちゃんがまりちゃんを襲っているのを見ることはなくなった。でも、そのたった一回の衝撃が何度も私を揺さぶっている。

私がまりちゃんのことを考えている間に、ぐるぐると頭を駆けていく気持ちは何だろう？ りとちゃんの近くにいたのが羨ましい。りとちゃんに触ってもらえて羨ましい。まりちゃんばかり、ずるい。

羨ましい。ずるい。他には？

「私も……まりちゃんに、触ってみたい」

両手をもじもじさせながら初めて口に出した恥ずかしい気持ちが、空気と一緒に私を震わせる。からっぽのフロアに響く声は、私の頬を熱くするだけで、誰にも聞けない。誰にも聞いてほしくない。

私はまりちゃんのことを、もう友達として見られなくなってしまったのかもしれない。

私はずっと、りとちゃんが好きなのだと思っていた。そして、まりちゃんのことと同じくらい好きだった。でも、二人に対しての好きは少しずつ違っていて、まりちゃんはPARKの良い同僚、良い友達のもりだった。

ちな子だったみたい。でも、まだ秘密なの。

*

ありがとうございました、と軽く礼をして今日の営業をおしまいにする。窓ガラスにお客さん向けの笑顔が映るのが見えて、外がまだ少し明るいなと思いながら浮ついた気持ちでステップを踏んだ。

「エー、タロウ。フランス語で話して」

外国語会話アプリとおしゃべりは、閉店後の密かな楽しみの一つだ。いつもはみんなでフロアの片付けをするから、あんまりのびのび練習できない。だから今日は早くお店を閉めて、残りを趣味の時間に使うことに決めていた。

タロウというのは、PARKに置いてある半身の腕なしマネキンに載せられたスマートスピーカーの愛称だ。廃墟探索で拾ってきたものを少し修理したら使えるようになったので、昼間はフロアの真ん中で名物店員と化している。発掘品としてはレア度が高いものではないけど、まともに動かしているのは私たちの店くらいだろう。

そんな中で、りとちゃんに愛されているまりちゃんを見たら、私は当然のように嫉妬する……はずだ。でも今の私には、嫉妬と同じくらい、満ち足りた気持ちと不安な気持ちとが同居していた。

私はりとちゃんが好きで、それなのにまりちゃんも好き？ でも、まりちゃんへの気持ちは友達だったんじゃないの？

「そうだよ。三人、三人で……でも、三人でえっちなことをしていたら、それは『誠実』なのかな……？」

三角形をもっと綺麗な形に変えられるなら、私は何だっです。もっと綺麗な形の三角形を作れるように、私は私の思いを整理する。

色々な理由を付けて今回の探索をお休みにしたのも、こういう気持ちを整理するためだ。半分は。

もう半分は、二人の関係の進展に期待して。えっちなために送り出したなんて言ったら、まりちゃんは怒っちゃうかも。顔を真っ赤にして怒るまりちゃんのことを想像すると、少しだけ楽しくなる。

ねえ、りとちゃん。知ってる？ 私、本当はすぐくえっ

発売当時はまだ全世界がインターネットで繋がっていたみたいけど、ネット回線が失われた今となっては、バックヤードに置いてあるサーバーの情報くらいしか取り出せない。防衛本部が持っているデータベースとか、各所で見つけたディスクの中身はコピーしてあるから、たいいの質問には答えてくれる。

語学学習用のアプリはタロウにもともと入っていたもので、そこから話す言語に合わせて色々な国のお話をしてくれるようにちよつと改造した。私のことを聞いて答えてくれるのは今のところタロウだけだ。りとちゃんにロシア語で話しかけても、不思議そうな顔をして頭やお腹を撫でてくれるだけだから。

りとちゃんはある程度勉強に興味がない。お店で使うレジ打ちくらいの知識ならまだしも、普段使わない外国語なんてなおのことだ。何度話しかけたって通じないのは分かっているのに、色々な言葉で話しかけてしまう。そうやって、りとちゃんに「わたし」を見せると少しだけ安心する。私の言葉を聞いてほしいと思う。

私が本を読んでいる時にわくわくしているのと同じよ

うに、りとちゃんはスケボーに乗って夜の原宿を駆け抜けながら「生きている」はずだから。そういうのびのびとした気ままな感性に、私は惹かれてるんだろう。

まりちゃんもそうだ。おめかしをしてお出かけするのが好き。可愛い服を作るのが好き。おしゃべりするのも大好き。きつと……りとちゃんのこと好き。素直で分かりやすい感情表現をするまりちゃんだからこそ、魅力的なクリエイティブを発揮できるのだろう。

世界が壊滅した今、今日や明日を生きるのに必死な中でお勉強だなんて。たまにそんな風にやけになってしまふこともあるけれど、私から溢れる私の気持ちを大事にしないと、自分を見失ってしまうような気がする。自分の知らない世界のこと、自分の知らない自分のこと、自分の知らないりとちゃんのこと、まりちゃんのこと。

本当はもっと二人のことを知りたい。二人と仲良くしたい。だから――

「あー……タロウ。今日はおしまい」

フランス語セットにない語調を検知したタロウの目が点滅し、日本語の検出に移行する。タロウの動きが何秒

か止まってから、語学アプリが終了する音がした。

お店を早めに閉めて語学の上達に努めるというのは表向きの目的で、本当はもう一つの目的がある。

実は、タロウにはまだ秘密の機能がかった。

「オーケー、タロウ。りとちゃんにつないで」

しかも、二人がいると絶対に起動できない機能だ。タイミングを見計らって秘密のパスフレーズを告げると、点滅が止まって「りとちゃん」が起動する。同じように「まりちゃんにつないで」と平坦な声で告げると、何度かチカチカした後にタロウの目から光が放たれた。

「り、りとちゃん。こんばんは」

【久しぶり、ことこ。最近あんまり呼んでくれなかったね】

【ねえ、ことこ。私もお久しぶり、なんだけど？】

「うん、久しぶりだね。こんばんは、まりちゃん」

灰明かりを放つりとちゃんとまりちゃんが私の前に立つ。くるっとターンするまりちゃんの体重を感じさせないふわりとした動きが、彼女らがホログラムであることに際立たせる。

りとちゃんとまりちゃんの声でしゃべるホログラムは、

私が考えていたよりも精巧に仕上がっていた。私がのめり込んで何度も呼び出してしまうほどには。

タロウに搭載されたアシスタント・アバター起動用アプリには、説明文の最後に「ホームビデオを永遠の思い出に」と書かれている。その説明の通り、パッドで撮影したごく普通のムービーを取り込んで二人の声と外見を合成してくれた。それこそ、永遠の思い出になるような。

【それデ、今日はどうしたのよ、ことこ】

【また、これからの三人の話？】

「うん。そうなの。すごく悩んで」

合成された声は完璧なものではない。でも、その微妙なイントネーションの違いのおかげで、まだ現実と混同せずにいられるのかもしれない。

【そうよねえ。わざわざ私たちを隠し撮りしてまで、こんなものを作っちゃうんだもの】

【私は別にいいよ。三人のコと、もっと考えても】

【あら、別に私も嫌ってわけじゃないわ】

「私ね、ずっと三人でいられたら良いなって思ってた」
遠い昔の私は、何もしなくても三人がずっと幸せにやっ

ていけると思っていた。でも、そんな簡単な話があるはずがない。

「まりちゃんは、りとちゃんが好き？」

【嫌いじゃないけど、気が合うタイプじゃないわね】

【そうかな？ 私はまりのこと、好きだよ】

【ふーん、そ？ 悪い気はしないけど】

【そうやって、照れてツンツンしちゃうところもね】

【おちよくってるの？ 私、ことこのほうが素直で好きよ】

【そうだね。ことこの素直で明るいところ、私も好きだよ】

「う、うん！ 私も二人のこと、好きだよ」

私がそう言うと、まりちゃんはわざとらしいほどの驚いた表情で、少しだけ沈黙を保った。

【でも、あなたが本当に好きなのはりとでしよう？】

【そうなの、ことこ？】

「そんなことないよ！ 私は二人とも大好きで……」

【じゃあ、りとと私、どっちが好き？】

【やめなよ、まり……でも、ちょっと気になるかも】

【本当に、どっちも同じくらい好きだよ】

でも、二人に対する好きはそれぞれちょっと違って。違

うはずで。違うはずだった。

「私、りとちゃんには私の全部を見てほしいって思ってる」

【全部見てほしい、ね。なんて美しい愛なのかしら】

【あれ。まり、嫉妬してる？】

【どうして、こんなことでジェラシーを感じなきゃならないのかしら？　そもそも――】

次に続くまりちゃんの言葉を覚悟して、胸がきゅっと締め付けられる。

【そもそも、全部だなんて、私にはそんな思いを受け止めきれるか分らないもの】

「うん。そう……だね」

【私は、できるだけ受け止めてあげたいな】

【そ。じゃあ、りととこと仲良くやればいいじゃない】

【ちょっとまり、それどういう意味？】

【分かってるくせに。私はお邪魔虫ってことでしょうか？】

「まりちゃん、違うの」

りとちゃんには特別な「好き」を、まりちゃんには友達の「好き」を向ける。そうだった。この前までは。

私は一拍置いてから、まりちゃんの幻影に向かって何

度目か分からない告白をする。

「最近ね、まりちゃんの全部が見たくなってきちゃったの」

【な、何よ、急に……】

【私もまりのこと、もっと知りたいかも】

【こともりとも、ごまかさないで。どっちが好きか、って話だったでしょ？】

「それは……」

【私、りともことも嫌いじゃないわ。でも、自分が一番じゃないと気が済まないたちの】

そこだけは分かってちやうだい、と付け足した。

【やっぱり、ここが決めないと、だめだよ】

【そうね。いつまでこんなことを繰り返すつもりなの？】

「うん、ごめんね。りとちゃん。まりちゃん」

【気にしないで。またね、こここ】

【まあいいわ。また会いましょう、こここ】

りとちゃんとまりちゃんが私のシナリオ通りに会話を終える。仕事を終えたホログラムが消えて、タロウの機械的なアナウンスが店内に響いた。私は糸が切れたようにその場にべたりと座り込み、軽く溜息を漏らしてしまう。

「ふあ、はあ……」

私はこういうことを何度か――何度も――していた。

アシスタント・アバターには、アバターのモデルの性格を元にして自律的に会話を進めるような機能はない。そのおかげで、私が書いた台本の同じセリフを何度も読み上げてもらうばかりになっていた。何も決めずに会話を繰り返せるのが、二人と一緒にぬるま湯に耽っているのが心地良かった。

「こと、こが決めないと、だめだよ」

たくさん聞いた言葉でも、いつか私が決めなきゃならないのだと意識するとちょっとだけ苦しくなる。

私は、まりちゃんと敵同士になってりとちゃんを取り合わなきゃいけないのかな？　それとも、私がりとちゃんを諦めて、まりちゃんと幸せになっているのを見続けられいいのか？　考えすぎて頭がぐるぐるしてしまう。

いっそ、りとちゃんにこの思いを告白してしまえばいいと考えたこともある。そうやって、りとちゃんとは特別な関係になって、まりちゃんとは仲の良い友達のままでいる。そんな不均衡な三角形のバランスが良いと思っ

いたのは、頂点にいるつもりだった「かつての」私だけ。最後には全部だめになって、簡単に崩れてしまうのは目に見えていた。

そんなの当たり前だ。だって、脆い理想に寄り添っていた私でさえ、まりちゃんが気になり始めているのだから。本ではいっぱい読んだ色々なことも、いざ私に降りかかると思えきれないものだと分かってしまう。私の中に渦巻いているのは、友情？　それとも、恋愛かな？　私は、もつと二人のことを綺麗な視線で見ていると思っていた。こんなことなら、りとちゃんとまりちゃんの秘密を見なければよかったのに！

私たちは、誰かが誰かを諦めなきゃいけないのかな。三人一緒にはいられないのかな。私がりとちゃんを諦めたら、私だけが取り残されてしまうの？

「そうしたら、私が二番目になって――」

二番目、と口走ってから思わず口を押さえる。

「うー……りとちゃん……まりちゃん……」

うなだれる私の声に反応してぼん、と不意にアプリ起動音が響いた。今度はホログラムが放たれることなく

二人の声が流れ始める。

【ねえ、まり。ここにいたずらしちゃおか？】

【いいわね、ベッドで両側から挟み撃ちにしちゃう？】

【そうそう。ことは耳が弱いから——】

「……っ！」

急にリアルな声で話しかけられて、私は思わずタロウの電源コードを引っ抜いてしまう。彼から放たれる色々な光の点滅がすぐに失われ、同時にファンも止まってしまった。

今のは、二人らしいセリフを自動でしゃべってくれる「フル・オート」モードだ。作りかけのせいもあって、よく想定外の暴走を始めてしまうので取り扱いに困っている。

「ふ、二人から、耳を……」

フロアが急に静かになって、静音ファンの弱い回転音が急に恋しくなる。二人のことを考えてどきどきしている心臓のことも今は意識しなくなかった。

お風呂に入って落ち着かなきゃ。今日はミントのお風呂にしよう。頭をすっきりさせないと。

*

一方で、りとちゃんの気まぐれシャンプーはPARKの不思議の一つだ。みんなで廃墟探索をしているうちに、いつの間にか在庫が増えている。りとちゃんが言うには「だって、髪は毎日洗わないといけないでしょ？」ということらしい。

りとちゃんが買ってくるシャンプーにはたいい値引きのシールが貼ってある。買い出し当番の度に、ワゴンに適当に漁って買ってきているのだろう。ワゴンに回ってくるのはデザインも中身もごく普通のシャンプーだけど、赤と黄色のシールのせいでもとて安っぽく見える。

りとちゃんの場合に限っては、むしろ拾ってくるシャンプーの方が個性的だ。いくつかの探索で、日本語が書かれていない（あれは中国語だった）シャンプーや歯磨き粉を拾ってきたのを見たりちゃんは、流石に呆れて言葉も出なかったみたい。

まりちゃんはよく「女の子なんだから髪くらい気を遣ったほうが良いわよ」と言うけれど、りとちゃんはどことなく風と聞き流してしまう。このことで一度けんかになったこともあるくらいだ。

お風呂は好きだ。その日あった良くないことを洗い流して、身体が全部良いことで包まれていくような気がする。毎日が楽しいことばかりなら、お風呂だって何倍も楽しくなるはずなのに。

頭からざぶっとお湯を浴びて鏡を見つめる。水に濡れた私の髪がべたりと張り付いて、何だか変な感じ。

バスルームにはみんなの個性が詰まっている。だから、三人で入るお風呂はもっと好き。柵に並ぶシャンプーひとつとっても、値段やデザイン、成分……注目するところは人それぞれだ。

例えばまりちゃんは、香りや高級感を重視して選んでいる。いかにも女の子っぽい可愛いデザインのボトルに惹かれるみたい。お風呂場に並んだピンク色やオレンジ色のボトルは、他でもないまりちゃんその人のものだ。

私は可愛いデザインよりも、ボタニカルとかノンシリコンとか、髪に優しい成分を気にしちゃう。植物成分のシャンプーは優しいけど保湿力に欠けるので、最近はこちらみつを配合したシャンプーを買っている。ほんの少し優しい香りがするのも好き。

綺麗な髪で原宿を駆けたらきつとみんなが振り向くのにね、と私に残念そうな顔でこぼすのも何度目だろう。りとちゃんが自分の髪に気を遣わないせいで、むしろまりちゃんのほうがころころ変わるシャンプーの様子をよく把握していた。

りとちゃんの気まぐれを押さえつけて、無理やりきちんとしたシャンプーを選ばせるのは難しいだろう。きっと、自分の好みを譲らないまりちゃんとけんかになってしまふから。

それを解決する折衷案が「気まぐれシャンプー」リストだ。新しいシャンプーがりとちゃんの肌に合わなかった時に——あるいはりとちゃんの「気まぐれ」で——自分のシャンプー遍歴をまりちゃんに確かめるのだ。

りとちゃんが使ったことのあるシャンプーリストから選ぶことにすれば、まりちゃんも好みを押し付けられない。まりちゃんはたまに不満そうな顔をするけれど、今のところこれが一番上手く行っている。

悪いシャンプーはリストにバツ印を付けて、前に使った「まだましな」シャンプーを探したり買ったりする。今

のりとちゃんシャンプーも、まりちゃんに確かめたりストから買ってきたものだ。

「本当に仲良しだよね、二人とも」

シャンプーボトルに引付いた剥がれかけの三割引シールが、りとちゃんの生活感を感じさせる。ボトルの凹凸を軽くなでて、それからポンプをかしゅつと押した。とろりとした冷たい液体が手に広がるのが心地良い。

かしゅ。もう一度ポンプを押すと、狙いが少し外れて手のひらからこぼれそうになる。

指で掬ったりとちゃんのシャンプーは、いかにも化学製品っぽい匂いがある。お風呂のペーパーミントと混ざって、何だか慣れない香りだ。

いつもと違う洗い上がりになるのが分かっていても、もう手に取ったシャンプーはボトルに戻せない。

りとちゃんをぐりぐりと両手に広げているうちに、心の中に後ろめたいわくわくも広がっていく。変な妄想が駆け巡って、りとちゃん色に染められていく私を想像してしまう。

もし、りとちゃんが煙草を吸うようになったら、私は

「じゃあ、そろそろ着替えて寝ようかな」

服も着ずに夢中で髪をくるくるいじっていた私が、ふっと鏡の中からいなくなる。

昔、タオルも巻かずに二人の前に出て、まりちゃんに怒られたことがあった。あの時は確か、シャワーの栓が壊れて止められなくなったんだっけ。本当は元栓を閉めてしまえば焦らずに修理できたんだけど、大慌てで知らせに行ったのを思い出す。

パジャマと一緒にまとめられた下着を取り出して、丁寧に広げてみせる。誰もいないはずなのに、思わず辺りをきょろきょろ見回してしまう。

それもそのはず、今私の手で広げられているのが、まりちゃんのパンツだからだ。

お互い間違わないようにオリジナルの下着を作りましょう、と提案したのはまりちゃんだった。一緒に暮らすようになってから、割とすぐに。寝室は特にごちゃごちゃしているから、個性のないアイテムは風景に埋もれてすぐに見つからなくなってしまう。

もともと、散らかりやすい部屋の中では特徴のあるグッ

煙の匂いも好きになるのかな。冬の寒空の下、顔を近づけて、私も煙草に火を付けて……。

私はそんな心地良い煙たさを包み込むようにして、わしわしと髪を洗い始めた。

＊

お風呂を上がった私は、タオルも巻かずに洗面台に立っていた。いつもと違う仕上がりの髪の毛をわさわさと撫でつける。

「うはー、りとちゃんの匂いだー！」

手に取った時は慣れない匂いのシャンプーも、髪を乾かしてみればお風呂上がりの良い香りを演出してくれるみたい。さっきとは違って、ミントと混ざったおかげですっきりとした良い匂いになっていた。

首を左右に振って背伸びをして、身体を動かしながらりとちゃんの「今月の匂い」を楽しむ。

今回のりとちゃんシャンプーは割と普通だったけど、指通りが少しだけきしきししている。やっぱり私の細い髪にはちょっと合わないみたい。

ズを使うようにしようという話はしていた。おかげでそれぞれの趣味をのびのびと楽しむことができたし、三人の個性も強くなった気がする。

だから、私たちがそれぞれの道を進んでいくたびに、お互いのことが分かってくる。違うものを見ているからこそ、だんだんとお互いの魅力が見えてくる。

おしゃれへのこだわりや、明るくておしゃべりな性格。射撃が上手で、私よりとっても強いところ。それに、えっちな……女の子らしいところも見てしまったわけだし。

まさか魅力の発掘が、パンツの勝手なシェアに行き着くとは誰も思わなかっただろうけど。

「まりちゃん、怒るかな？」

気付かれないようにしなとね。

足を通して、太ももを通して、ゴムを軽く伸ばしてお尻にかぶせる。当然、お手製とはいえ下着としての実用性は守られているから、あっけなく装着できてしまう。

鏡に戻ってきた私が、パンツ一枚で嬉しそうな顔をしてくるくる回りだす。

まりちゃんは、ピンクの布地にレースが付いて、緑の

チェック柄で縁取られている。私には少しだけ大きい。す
とんとした私の身体と違って、まりちゃんが魅力的なプ
ロポーションなのが手に取るように分かる。

「りとちゃんは、こういうのが好きなのかな……はう……」
するりとお尻を走った指で、自分が思ったよりも敏感
になっていることに驚いてしまう。

思わずへたりこんでしまった私の中に、まりちゃんを
触るりとちゃん、りとちゃんに触られるまりちゃん、い
ろいろな感覚が混線して頭がぐちゃぐちゃになる。その
まま身を委ねて曖昧な感覚に溺れたくなってしまふ。ま
だ、寝る前の勉強もしないといけないのに。

そつと手を滑らせて、レースの部分を手で撫でてみせる。

今日も綺麗だね、まり。りと、どこ触ってるのよ。こ
とが見てるじゃない。いいじゃん。見せてあげようよ。
ちょ、やだ、りと――

「これは、ちょっとヤバイかも……」

ぼふっ、とベッドの柔らかさに包まれて、色々なこと
を考えたくなる。もこもこのパジャマに袖を通して
いる間も、布地が擦れていちいち身体を揺らしてしまう。

まりちゃんとぴったり肌が触れていることを意識させ
られながら、結局私は悶々とした気持ちで寝室に向かう
ことになったのだった。

＊

ぼんやりと思う。私たちには、私たちのやり方がある。
「りとちゃんまりちゃん。報告書に書けないことはしな
いほうがいいよ……？」

探索から帰ってきた二人は、何事もなかったかよう
に北方探索のお話を聞かせてくれた。文字を食べるクラ
ゲが水槽にたくさんいたけど、その存在を隠し通すつも
りなのだという。

「そうかもね。でも、可愛いクラゲの平穏と静寂を守れ
たから、朝はとっても気分が良かったの！ね、りと？」

「ふふ。これからはちゃんと気を付けなきゃね、まり」
でも私は、探索に出かける前に倉庫のお酒が一本減っ
たのを知っている。りとちゃんがそのお酒を飲んだこと
も分かっている。あわよくば、もっと楽しいこともした
のだろう。

ことこのスケジュール帳

ことが愛用しているスケジュール帳。普段の予定は
パッドで管理しているので、この手帳にはあまり書き込
みがない。一ヶ月分の予定が書き込める見開きページに
は、赤・青・緑のハートが一枚ずつ貼ってある。

黒いノートパソコン

ことがよく日記の下書きに使っているノートパソコ
ン。もとは探索中に発掘したもので、少し修理するだけ
で使えるようになった。スペックはそれなりだが、けん
かに巻き込まれても壊れなかったほどのタフさを誇る。

ページが抜けた日記帳

ことがほぼ毎日書いている日記帳。一度だけりとに
読ませようとしたことがあるが、そのまま突き返されて
しまった。実は、一部のページが丁寧に切り取られてお
り、その部分はもう誰も読むことができない。

いいんだ。全部、私が望んだこと。これからの関係は私
たちが作っていくの。また、一緒にお風呂に入ろうって、
ちゃんと言わなきゃ。

ミックスサンド・ベイキング

片桐天音

a

クラゲはふわふわと舞うのです。ふわふわ、ふわふわと。水中のクラゲはそう大きな声で鳴かないそうですから、やはり私は水槽を前にしてもクラゲの鳴き声に気付けなかったのです。あるいは、水槽のクラゲはもうずっと前から弱っていたのかもしれませんが。

クラゲは原宿でも、ふわふわと飛ぶのでしょうか？ きっと、寒い冬の夜をゆっくり散歩すれば見られるのでしょうか。澄んだ海の中で。今のバブルドームは嫌というほど濁っていて、この澱んだ空気はクラゲには——当然、彼女にも——暑すぎますから。

間違ってクラゲに触れてしまったら、簡単に壊れてしまうのです。死んだら幼生に還るクラゲもいると聞いたことがあります、そういうクラゲはいつ生きていて、いつ死ぬのでしょうか。

生き返ったクラゲは、本当に死ぬ前と同じなのでしょうか。私には分かりません。だって、砂糖漬けになったクラゲは、もうクラゲではないのですから。

るけれど、酔った私では彼女を押し返すことも叶わない。

諦めてりとに身体を任せてしまうと、いつの間にかスケボーもお酒も映画も、私の視界から消えてしまう。そういう「日常」が見えなくなってしまうのが少し怖い。

りとは余裕そうな笑顔で私を好き放題にするし、一方の私はその責めに必死で抵抗しているのを隠せない。そんな風に立場の差を見せつけられるのが、私が必死になっているのを見られるのが、たまたまなくイライラした。

夢のことを思い出す度に、私の頬が熱くなる。現実のりとに触れるだけで、少しだけ胸が高鳴る。りととのやわらかい肌の感触や、私の身体を走るピリピリとした刺激、りとが私を見つめる楽しそうな視線。

そういう感覚が全部、夢にしてはやけにリアルで。

「本当に、嫌になるわ」

夢は願望の現れだなんていうけど、あれはきつと嘘ね。私、あんなこと考えていないもの。

それにしても、ここが一度も出てこないのって、なんだか変ね。ことごと街歩きをした日くらい、夢に出てきたっていいのに。

b

最近妙な夢を見る。りととの夢だ。

その夢には色んな場所が出てくるけれど、なぜかいつも、そこできりととお酒を飲んでいる。二人きりの夜で、他には誰もいない。ことこさえも。

ある時はスケボーのメンテナンズをするのを眺めながら、別の時はソファに座って流行りのホラー映画を観ながら、一緒にお酒を飲む。そう、原宿の外で探検している間に酒盛りなんてのもあったわね。

夢の中のリとはいつもより少し大胆だ。平気な顔で「これ、桜餅みたいな香りのお酒だって」だなんて、強いウォッカを持ってきたりする。お酒に弱い私のことなんてお構いなしに。

そうして、お酒に酔った彼女は私に悪いちょっとしたをかけてくる。私の耳に吐息たつぷりの熱い声で囁いたり、私の身体を優しく触って痛めつけるのだ。

私は慣れない快感に身体をくねらせて、それをりとがくすくすと笑う。腕に力を込めてりとから逃げようとす

1

「さて。飾り付け、これくらいでいいかしら？」

PARKを包み込む朝が、いつもと少しだけ違う。まるで明日から夏が始まるような、何かしたくてむずむずしてしまう空気が流れている。

今日はちょうど、春と夏の境目だ。

バブルの中には梅雨がないから、肌寒い春がそのまま暑い夏に移り変わっていく。バブルの外で降る雨は、私をそっと冷やしてくれるのかしら。こんなに蒸し暑いと、何でもいから浴びたくなってしまう。

「お店がすっかり、クラゲまみれだね」

レジに座ったりとが、改めてフロアをぐるりと見回した。そう、今週はクラゲフェアなのだ。りとこの言うとおり、フロアがたくさんのクラゲグッズで埋め尽くされている。

廃墟で見かけたクラゲの話を聞いたことは、目を輝かせて図鑑の色々な写真を見せてくれた。聞いてみると、不老不死のクラゲがいるらしくって、一度見てみたかったみたい。りとと二人で見た水槽のクラゲとは、だいぶ

形が違うみたいだったけど。

そこからアイデアを得たことが、「クラゲフェアで大儲け！」作戦を思いついたってわけ。

「最近暑いからね。涼しげな方がいいかな？なんて」

「見た目が涼しげなのはいいけど、気温の方もちゃんと下げてほしいわね」

初夏の空気がワクワクするけど、こんなに蒸し暑いとほんと嫌になっちゃう。

どうしてバブルドームには、新しくてもなエアコンが入らないの？ ちまちま修理してないで、さっさと交換しちゃえばいいのに！

「エアコンはあんまり切りたくないんだけど、ちょっと電気代と相談しないと……」

そう言ってお金を確認するりと。赤字スレスレなのはみんな分かっていたけど、りとはわざとらしく溜息を吐いて、ふるふると首を振った。

『電気代フェア』にでも改名したほうがいいかもね」

「じゃあ、電気クラゲも注文すればよかったかな？」

冗談に冗談で答えることこの声が、いつもより楽しそう。

飾り気のない白い壁や棚が、今日は新しい商品と新鮮なデコレーションでいっぱいだ。久しぶりのフロアの模様替えに、みんなが心躍っていた。

コンセプト作り、商品選び、飾り付け……一つのテーマに向かって頑張るの、やっぱり私たちらしいって感じがするわ。もちろん、新しい商品をたくさん並べて、いっぱい儲けられそうだからっていうのもあるけれど。

商品の配置と飾り付けはもう終わっている。細かい調整を済ませば、開店準備完了ってとこね。

「まりの作ったくらげのモビール、やっぱり可愛いね」

りとが頬杖をついたまま天井を見上げた。ぼんやりした視線の先では、PARKオリジナルの特製インテリアがゆらゆらと揺れている。

「そう？ リアルさを大事にしながら、オーガンジーでスカートを履かせてみたの」

フロアの真ん中に吊るされたふわふわの傘が、ティアドロップのクリスタルと一緒にきらきらと輝く。サーキュレーター風の風がクラゲに当たると、薄いスカートが海の中にいるみたいにゆらめくのだ。

うん。自分でも、とっても綺麗に仕上がったと思っているわ。細かい作業なら任せておいて。

「うん。すっごく幻想的だね。やっぱり、まりちゃんにお願いしてよかった」

「あら、嬉しいわね。ありがと、ことこ」

自分が作ったものを褒められるって、やっぱり嬉しい。私ができることは、私がしっかり頑張らないとね。

「ことこの商品選びも、なかなかイケてると思うわ」

「うん。センスいいね。こだわを感じるよ」

「そうかな？ えへへ」

実際、ここに任せた発注はよく整っていた。青を基調とした陳列に黄色や白のグッズが差して、クラゲのイメージとは違ってカラフルに仕上がっている。

ことがフェアの計画中はずっとコンピュータを叩いていた理由、よく分かった気がするわ。

「私は、これが一番好きかな」

そう言って、りとがレジに並んだクラゲをひょいといつ手に取った。無色透明のガラスでできたペーパーウェイトの中に、真っ赤なクラゲが閉じ込めてある。

「うん。それオススメなんだ。クラゲの部分もガラスで出来てるんだけど、一つ一つの色合いが全然違うの」

ことが言うには、ガラスの色や温度をわざとばらばらにしているみたいで、それぞれが世界に一つだけのクラゲなんだという。確かに、りとお気に入りのは暗めの赤色でひととき鈍く輝いていて、あの時の怪物クラゲを思い出させる。

りとは手の中のクラゲをひとしきり眺めた後に、気だるそうに身体を起こして、ことこに向かって腕を伸ばした。

「ことこ、これ貰ってもいい？」

「うん。もちろんいいよ！」

りとは「ありがと、大事にするね」と答えてから、満足げな表情でピンク色の付箋をクラゲの頭に貼り付けた。

小さくて可愛い怪物がクラゲの列に戻されて、ガラスがぶつかる時の小気味いい音がする。自分だけ「売約済」のラベルを貼られて、なんだか誇らしげだ。

「まりちゃんも、欲しいのあったら持っていってね？」

「うーん、そうね……」

話を振られて、棚に置かれた商品を改めて眺めてみる。

とりあえず手に取ったのは、水で満たされた不思議な置物だ。透明な筒の中に、細い脚がたくさん生えたプラスチックのおもちゃが入っている。ちょうど、手に収まるコップくらいの大きさだ。

筒の上の黒い蓋には「クラゲチューブ」と書かれていて、封入されているのはクラゲのイミテーションらしい。ミニチュア水族館のつもり？

持ち上げて、裏に付いていたスイッチに触れると、底から照らされる光に合わせてビニールのチューブが水中で踊りだした。変な動きねえ。

「ふわふわっていうより、ぐねぐねって感じね」

「電池で動くクラゲだって。本物を飼うのは難しいらしいから、気分だけでも楽しめるように作られたみたい」

「クラゲらしさがなくて、これはイマイチね」

「あれ？　そうかなあ……？」

小さな水槽を泳ぎ回る七色のチューブは、初めて見たクラゲの繊細さが懐かしくなるほどに荒々しい。もし水族館が残っていたら、今すぐ本物のクラゲを見に行きたいくらいだわ。

ずっと北の方には、クラゲをたくさん展示している水族館があったみたい。私たちが行くまで、残っていたらいいんだけど。

「ほかにいいもの、いっぱいあるから！　ほら、ね？」

そう言っ、ここは私の背中をぐいぐいと押してフロアを回らせようとする。お気に入りのグッズを見つけてもらえないのは、商品担当のプライドが許さないらしい。

「わ、分かったわよ。もうちょっと見てみるから」

食器やハンカチは、グッズとしては定番ね。水色や黄色の素材にデフォルメしたクラゲの絵がプリントしてあって、ポップな感じ。

でも、どのクラゲにもくりくりとした黒い目と口角の上がつた線が描き込まれていて、ちよつと慣れない。りとと見たクラゲは、もっと寡黙で寂しげな感じだったから。

「——こういうの、子供向けなのかしら？」

「水族館から出てきたグッズは、子供向けが多いみたい」
大昔にクラゲブームがあったらしくて、供給過剰の新品もかなり多い。いつもは状態のよくない中古品ばかり入荷してる（拾ってきたとも言わね）から、フロア

の雰囲気もいつもとだいぶ違う。

「赤いくらげにも、顔が付いたら面白かったかも」

「あら。りとなら、ホラー映画の観すぎじゃない？」

あの子犬サイズの怪物にすっかり顔が付いていて、目線がぶつかっちゃったりなんてしたら……ちよつとゾツとしちゃう。

「まりも、ホラー映画好きでしょ？」

「りとが観たいっていうから付き合ってるのよ？」

「ふふっ、そうだね。ありがと、まり」

映画の観すぎっていうよりは、ホラーゲームのやりすぎなのかもしれないけど。ホラーゲームだと、どうしてもりとと銃さばきに勝てなくて——

「——ちょ、ちよつとりとちゃん！」

と、会話を遮るようにして、ここがりとに声を掛けた。レジはそんなに離れていないのに、フロア中に響くような大声だ。急ぎの用事でもあるのかしら。

「どうしたのよ、ここ。そんなに大きな声で」

「まだ朝食前なのに、元氣だね」

「あつ……いや、違うの！　ちよつと、思い出したから」

我に返ったことが、私とりとの視線を集めているのに気付いて急に慌てだす。身振り手振りで何かを伝えようとしているけど、動きが素早すぎて伝わらないところ、いつものことこって感じる。

「ごめんね。えっと、もう開店直前なんだけど、まだ準備ができてないっていうか、お願いしたいことがあってね、それで、それで……」

「ここ、落ち着いて」

「あ……うん。看板を、外に置いてきてほしいの」

「……看板？」

お願い自体は変なことじゃないのに、その脈絡のなさに混乱してしまう。りとも私と同じことを感じていたらしく、すっきりしない顔で立ち上がった。

「ここ、これだよね？」

りとが私の視線と同じ向きに指をさす。

看板というのは、クラゲフェアの開催を伝える立て看板のことだろう。

黒いパネルに水色のペンでふわふわと踊るクラゲは、りとが描いたものだ。その横に「クラゲフェアです　ナウ・

オン・セール！」と細めのゴシックで記されている。最近
は、妙なウェイトのダサイ日本語フォントが流行ってい
るらしい。

「そ、そう！ 花壇の水やりもお願いしたいな、なんて」
ことこの様子がどこかおかしい。

こういう時のことって、だいたい一人で変なことを
考えているのよね。看板の話自体にはおかしなところが
ないのに、どこか不自然に見えた。

「あー……そっか。うん、分かった。行ってくるね」
たぶん、りともこの不自然さを感じているけれど、それ
をわざわざ追及するつもりもないのだろう。りとしたら、
ことこには甘いんだから。

レジを離れたりとは、腰の高さほどのアルミフレーム
を両手に抱えて外に向かう。それに合わせるようにして、
ことこがレジをすり抜けてバックヤードに引っ込んだ。

＊

実は、あのパネルの裏には劇画チックな赤いくらげの
絵が描いてある。まるでお化け屋敷のような立て看板は、

好意を伝えたり、褒めたりするのって、私には少し難
しい。いつだって、皮肉と言いついでぐるぐる巻きにして
ぶつけてしまうから。

「じゃあ、りとちゃんに好きって伝えないとね？」

「まあ、気が向いたら、ね」

好きだなんてはつきり伝えるのを想像すると、夢のこ
とを妙に意識してしまう。ありもしないことを思い出し
て、勝手に顔が熱くなってしまう。

りとがとんとんと階段を降りる音が少しずつ遠くなる。
ふいと窓に視線を向けると、示し合わせたように足音が
聞こえなくなった。

「まりちゃん、大丈夫？ なんだか顔が赤く——」

「ね、ねえ！ ことこ、何を持ってきたの？」

心配そうな表情をかき消すようにして、今度は私が話
を遮る。ことこはきょとんとした後に、笑顔でスカートの
ポケットに手を伸ばした。

「私のおすすめ商品『クラゲチップス』だよ！」

ことこがポケットからがさがさと取り出したのは、透
明な欠片がたくさん入った小袋だ。レジに置かれた白い

夏の訪れも相まって納涼感こそよく出ているけど、残念な
がらクラゲフェアの宣伝には使えない。前面に押し出さ
れたホラー要素は、ギャップというにはあまりにイメー
ジと離れすぎていた。

完成した看板を見て、フェアのコンセプトと違うとい
う話をしたらそこでまたひと悶着。りとは「ホラーな感
じが出ないじゃん」と不満げだったけど、コンセプト重
視のことこの意見も頼ってなんとか押し切ったのだ。

「りとして、絵は上手なんだけど、たまに理解に苦しむわ」
少しして、商品でいっぱい陳列かごを抱えて戻って
きたことこに、私は独り言のように呼びかけた。

「そう？ りとちゃんの絵、私は好きだよ」
すっかり落ち着いた様子のことが、かごを置いてレ
ジ越しに言葉を返す。

「あら、もちろん私だって嫌いじゃないわ」

面と向かうと上手に言えないけど、りとの技量に文句
があるわけではなかった。実際、ボツにしまった看
板だってすごい上手だったし。店内に立てられたりとお
手製ポップは、文句のない出来栄えだ。

かごいっぱい並べられた商品と——既に開封されてい
ることを除けば——同じものらしい。

袋に「バジルペッパー味」とプリントされているのを
見ると、「クラゲチップス」の名の通り、お菓子であるこ
とが分かる。

「食べるの？ クラゲを？」

「うん！ 昔は食用にしていたみたいだよ。あ、もちろん
これは合成たんぱくなんだけどね。加工に秘密があって、
サクサクとコリコリが両方楽しめるの」

わざわざクラゲを食べようだなんて、合成肉みたいに
食糧危機から生まれたアイデアなのかしら。

合成肉も初めはゲテモノ扱いだったらしいけど、私た
ちが生まれた頃には安くて美味しいという触れ込みで生
活によく馴染んでいた。ハムやソーセージ、妙に四角い
お肉、大げさな「天然」ラベルのないものは、たいがい合
成肉を使っている。

ただし、お魚は養殖技術と品種改良のおかげで合成す
るより安上がりになるらしく、ほとんどが「天然モノ」の
ままだ。

聞き慣れないマイナーな動物のお肉も、出回っているのはほとんどが合成たんぱくから作られた「復刻版」らしい。このクラゲもそうなのだろう。

「これ、どうやって食べるの？」

「普通のお菓子だから、そのまま食べられるよ」

ここがクラゲチップスの袋を開けて、クラゲの欠片を口へ放り込んだ。少し遅れて、バジルの香りがふわっと漂ってくる。

食品コーナーに並んでいるのは、オレンジ味、ぶどう味、バジルペッパー味、青のり味……あら、バナナパクチー味もあるじゃない！

「えーと、これは何の味？」

「こっちは塩漬だよ。水で戻してサラダのトッピングにしてもいいし……そうだ！ カップ麺の海苔の代わりに使ったらどうかね？」

「ことこって、ほんとに食いしんぼさんよね」

「えへへ、お腹空いちやって。まりちゃんも食べてみる？」

そう言って、ここはかごから新しい袋を取り上げた。「お砂糖に漬けてあるの。ちょっと甘すぎるかもしれない

いけど、こっちもそのまま食べてOKだよ」

クラゲは見た目の通り水分がたくさん入ってるから、普通は塩漬けにするみたい。ただのチップスは湿気を吸いやすいから、料理に使うなら塩漬け、お菓子なら砂糖漬けがおすすめらしい。

ピンク色のチェック模様で飾られた袋には、カラフルなゼリーやアイスクリームの写真が添えられている。涼しげなお菓子に使うといいみたいね。

「大丈夫。成分的にも問題ないみたいだから」

「そ。ならいいわ」

袋をじっくり眺めていたせいで、疑っているように見えたらしい。わざわざそんなことを言われると、逆に怪しく見えちゃうけど。

ま、たっぷりの調味液でごまかした激安合成肉よりはましよね。私はびりびりと開けたチャックの隙間から、一番小さな欠片を口に放り込んだ。

「あ……シナモンが効いてて美味しい」

舌に当たるざらざらとした砂糖の感覚が心地いい。じわりと甘さが走って、噛むたびに齒ごたえと香辛料の刺

激がついてくる。

クラゲそのものにはあんまり特徴的な風味はないけれど、独特の食感はおすすめポイントね。

合成肉のケミカルな風味を消すために、強めのスパイスで香りをまぶすのはよくあるやり方だ。一緒について回る薄い磯の香りは、たぶん後から付けられたものだろう。

「ただいま。水やりも終わったよ」

「あ、りとちゃん。おかえり」

コリコリとした食感を楽しんでいると、準備を終えて戻ってきたりとがひょこっと顔を出す。

「外から見えていくと、やっぱり少し印象違うね」

改めてゆっくりと店内を眺めながら戻ってくるりを見て、レジに収まっていたことが立ち上がろうとする。りとは私の隣で「いいよ、座ってて」と言いながら、そのまま壁に寄りかかった。

「二人とも、何の話してたの？」

「看板が可愛いねって言ってたの。ね、まりちゃん？」

そう言って私に話を振るものだから、りとの視線も私に向けられてしまう。

「そ、そうね。なかなか悪くないと思うわ」

壁や天井にふらふらと視線を向けながら、精一杯の答えを絞り出す。さっきことごと話していたことが、なかなか口から出ていかない。ボツになった看板に言い過ぎたのもあって、少し気まずかった。

「うん、ありがと。ことこ、まり」

でも、りとはそんな私の気持ちなどどこ吹く風というように、さらりとお礼を返す。そして、りとは私たちが手に持っているクラゲ菓子に気付いて指をさした。

「それ、配給？ 変わり種の合成肉、久しぶりだね」

「ううん、配給品じゃないの。どうしても食べてみたかったから、フェアに合わせて入荷してみたんだ」

復刻版の合成肉は高いごちそうとして、あるいは安い代用品としてしばしば配給に紛れ込んでいた。それぞれの当たり外れは大きいにせよ、単調になりがちな配給のいいアクセントになっている。

「この前のは、固くてあんまり好きじゃなかったわ」

「たぶん、クジラかな？ 保存の仕方が悪かったかも」

クジラはすごく大きい動物で、昔はよく食べていたみ

たい。かつては、原宿の近くにもクジラ専門レストランがあったらしいし、美味しい料理法もあるのかしら。

「その前の合成肉は？ あれは美味しかったよね」

「あのすごく柔らかいやつ？ 確か、ウナギだったわね」
ウナギという名前は、あんまり美味しそうな名前ではなかったから逆によく覚えていた。かつては、骨も無くて柔らかい脂の乗ったお魚だったらしい。

でも、どうして骨が無かったのかしら？ ことこの説明は難しくよく分からなかった。

「ウナギは高級品だったみたいだよ。合成品が出回ってよかったねえ」

「でも、ミックスサンドは具材のバランスが命なのよ？」

高級品だったという割には、配給日前のミックスサンドで適当に消費されていたのを思い出す。まぶされた和風のたれは美味しかったけど、実のところウナギの食感はあるまり覚えていなかった。

お金がない時は、いつだってミックスサンド。今週も、家中からかき集めた余り物で作った気まぐれサンドイッチが続いているのだ。

間帯だもの。ほんと、バブルドームが古すぎるのが諸悪の根源よね。

こんなに日差しの強い午後なのに、ついさっき、りととことが二人で買い出しに出かけていった。

私は涼しくなってから行くように勧めたけれど、ことはどうしても言い張って聞かなかったのだ。結局、りとも荷物持ちとしてついていくことになった。

当然、私はお留守番。とっても暇な店番だ。日焼け止めクリームも完璧ってわけじゃないもの。

二人が外に出かけて、私が一人で残って店番をする。思い出してみると、最近はこうやって一人でぼんやりする時間が少なかった気がする。いつもと違う店の中、一人で話し相手もなく、暇な時間がゆったりと流れていく。静かな海の音に囲まれて……何だか、落ち着かない。

やっぱり、今日は少しだけ変な日だ。

ことこのおかしい言動が、私に波乱の予感を与えているのかもしれない。こういう時のことは、いつも一人で大きな問題を抱えてるから。一人で頑張ろうとするところ、直ってないのよね。

「じゃあ、クラゲフェアでしっかり稼がないとね！」

「そうね。エアコンも食生活も救わなきゃ」

立ち上がったことが腕を突き上げると、シャツの裾がふわりと舞い上がる。と同時に、ぐう、とことこのお腹が鳴いた。

「食べ物話してたら、お腹空いてきちゃったわね」

「じゃあ、バックヤードで朝食にしようよ。お客さん、まだ来てないみたいだし」

もう開店の時間は過ぎていたけれど、外を歩く人通りはまだばらだ。夏の朝は、いつもより少し遅い。

2

午後になると、ちらほらとお客さんがやってくる。店内の雰囲気さがらりと変わったPARKに、初めてのお客さんも常連さんもいい反応を示してくれた。

夏の間、客足のピークは——特に、近所のショップの子たちが遊びに来てくれるのは——夕方近くになることが多い。お昼過ぎなんて、一番暑くて日に焼けちゃう時

「さて、お縫製の続きでもしようかしら」

手持ち無沙汰で落ち着かない時間を過ごすのに耐えかねて、私はレジにミシンを持ち込むことにした。少しずつ進めていた夏服が、そろそろ完成するところなのだ。

「もう少しね」

小さい頃から、ずっと自分で服を作ってきた。自慢できる特技と言ってもいい。

ママにミシンを借りて縫っていた頃は、服を買うお金がないから頑張ったものだった。今ではもう、節約のためというよりも、自分が納得する服を手に入れる一番の近道だと思ってる。

それに、私がPARKに貢献できるのは洋服くらいだから。ことこみたいに頭脳派の戦略も立てられないし、りとみたいにポップなイラストでお客さんを集めたりもできない。だから私は、来てくれたお客さんが喜ぶような最新の服を作らなきゃ。

古着のほころびを直すくらいなら、ともことこもできるけど、少し込み入ってるとすぐに私の出番になる。もちろん、デザイン画はりとに手伝ってもらうこともある

し、そこは頼りにしてるわ。

それとは逆に、私がりとを手伝って店内の飾り付けを作ることもある。全体の計画はここが練ってくれるから、安心して作業できるの。

りとしてたまに合わないところがあるけど、こうやって三人一緒に頑張れるのってすごくいいことよ。

当のりとは、面と向かって言えないけど。

「二人とも、何してるのかしら」

りとところどころ二人だけで外に出かけているのは珍しい。どちらかといえば、二人で出かけるのが多いのは私とところどころだ。ショッピングをしたり、食べ歩きをしたり、うわさ話を交換しあったり。はしゃぐことは色んな話を聞かせてくれるけど、たまにありえない空想のお話ばかりになってイライラしちゃうこともある。

ところが熱心に語り出す夢見がちな海外旅行計画も、スクーパーズが来なかったら実現していたのかもしれない。そうしたら、こんなバブルの中で閉塞感に満ちた生活を送ることもなかっただろう。

でも、スクーパーズがいない世界で、私たちは出会う

ことができたのかしら？

「……あっ、やだ」

慌ててミシンから足を離すと、ほとんど縫い終わっていた軌跡が少しだけぶれて止まっていた。規則的なミシンの音にとりとめのない考えが重なって、手元への注意が薄れていたらしい。

ほどこいて縫い直そうか、それとも上から何かを縫い付けてしまおうか？ 普段ならすぐに糸を抜いて、薄く残る針の跡でさえ気にしてしまうところだけど、今日はどうしてか気怠い空気が私を包み込んで離さなかった。

「なんか、昔を思い出すわね」

ぶれたミシンの跡は、昔を思い出させる。まだ上手にミシンを扱えなかったあの頃を。

川崎でママやパパと一緒に暮らしていた頃は、お姉ちゃんとしてみんなのお世話をしなきゃならなかった。それだけ我慢が多かったし、自分の好きなことをしたせいで叱られるのは、今でもすごく嫌だと思う。

みんなは、今頃どうしているのかしら？

そんなに悪い思い出じゃないけれど、帰りたいかと訊

かれるとやっぱり「ノー」ね。家を離れる直前は治安もよくなかったし。

曲がったミシンの糸の軌跡を見つめて、指でなぞる。

「やっぱり、縫い直しましょ」

ちくちくと糸を解いてから布をぴんと張った。どれだけ擦ってみても、影になった針の跡はもう消えない。

＊

私がミシンで作るのは、自分の服だけではない。お店で売る服はもちろんだけど、りとやことこの持ち物を作ってあげることもある。

実は、今日りとが提げていったショルダーバッグにも、私が作ったポーチが入っていた。

私がミシンで初めて完成させたのは、自分の服を使ったポーチだった。あのポーチにも、さっきみたいに歪んだ軌跡が走っていたわね。

古着をポーチに作り変えるのは、原宿に来るよりもずっと前に覚えたテクニクだ。いつでも布を買ってもらえるわけじゃなかったし、着られなくなった服をずっとし

まっておくのも寂しい気がしたから。

それから、小さくなった服を裁断して新しいアイテムに作り変えるのは私の習慣になった。とはいえ、身体が成長して服が入らなくなるなんてことはもうない。今ではむしろ、ほつれたままチェストに突っ込まれたりとの服をリメイクすることが多いくらいだ。ここもそれを見て、「私にも作って」なんて頼んでくる。

こういう時に、ここは全身で喜びを表現してくれるけど、りとはやっぱりそっけない。

シャンプーもボディソープも、りにとっては昨日の夕食くらいにどうでもいいことだ。私のポーチも、それと同じ。口でこそ「可愛いね」とは言うけれど、りとは、自分がどうでもいいと思ったことはとことん気にしない子だから。

それでも、自分の作ったものがずっと使えてもらえるのって、やっぱり少しだけ嬉しいわ。

「これくらいでよさそうね。ちょっと合わせてみましょ」
ばさり、と完成品を広げて鏡の前でひらひらと振ってみせる。縫い直した部分の仕上げも終わって、思い描い

ていた通りの爽やかな夏服ができあがっていた。フリルの付いた淡いブルーのワンピースは、クラゲフェアからインスピレーションを得て作り始めたものだ。白黒のポルカドットが添えられて、思った通りのレトロな雰囲気を引き出している。これなら――

「これなら、りとも可愛いつて言ってくれるかしら……」
――って、違う！ 首を振って変な想像をかき消した。変よね。りともことも、いつも可愛いつて言ってくれるんだから、今更照れることなんてないのに。

「こんにちは。まりちゃん、いるかな？」

と、お店の入口から声がした。久しぶりのお客さんだ。できたての服を片手に、鏡の前から離れて振り向くと、原宿らしいカラフルなリボンが目に入る。

「いらっしやいま……って、さゆみんじゃない！」

エプロンドレスの聞き慣れた声は、クレープ屋さんのさゆみんの声だった。クーラーボックスを提げて配達に回る姿は、もはや原宿ではおなじみと言ってもいい。

「すっかり暑くなっちゃったね。お店があんまり暇だから、遊びにきちゃった」

「屋台だと仕方ないわよね。うちも今日からフェアなんだけど、売上はぼちぼちってとこ」

ショップの子たちの間では、署名を集めて防衛隊にエアコン修理を急がせようという話になっているらしい。実はみんなお店の売上なんかどうでもよくて、決起集会とは名ばかりの飲み会を開いて大騒ぎしたいだけらしいけど。「クラゲフェア、だっけ？ PARKの雰囲気がすっかり変わってて、びっくりしちゃった」

「そうなのよ。ちょっと色々あってね」

くらげやことこのアイデアについて教えると、さゆみんは「ことちゃんらしいね」と軽く笑う。そして、私が左手に抱える服を指さした。

「それ、新作？」

「そうなの。たまには時間を掛けて自分だけの服を作ってみようと思って」

「すっごく可愛いよ！ 気合入ってるね」

そうでしょそうでしょ、と心の中で答えながら鼻を高くした。りとに褒められたって、照れずにこうやって得意げにしていればいいのだ。

さゆみんはひとしきり新作を眺めてから、クーラーボックスからごそごそとピンク色の箱を取り出した。

「そんなまりちゃんに、差し入れ。新作のクレープだよ」
小さな発泡スチロールのケースがレジに置かれる。表面のひんやりとした感覚が空気を伝わってきて、蒸すような暑さが少し和らいだ。

「ありがとう！ 今、りともことも出かけてるから、後でいただくわ」

「あ……りとちゃんのことちゃんには、もう渡したの」
「あら、そうなの？」

どうやら、買い物途中の二人とすれ違っていたらしい。なかなか帰ってこないと思ったら、さゆみんとおしゃべりしていたようだ。

「りととことこ、何か言ってた？」

「木陰でもやっぱり暑いねーとか、そんな感じ？ まりちゃんはお店にいるって聞いたから、寄ってみたの」
「そ、そう……」

木陰？ 下で涼めるほど大きな木は、公園くらいにしかない。二人は買い出しに出ているはずだけど、荷物が

多くて休憩でもしているのかしら。

やっぱり何か、少し変ね。

*

「――ちゃん、まりちゃん。起きて」

「ん……あら、ことこ。帰ってたの」

店番をしているうちに、いつの間にか寝てしまっていたらしい。外はいつの間にか暗くなりかけていて、うだるような暑さは少しだけ和らいでいる。

さゆみんの持ってきたクレープの包み紙は、レジの横に綺麗に畳んで置かれていた。

「まりちゃん。ちょっと、話したいことがあるの」

身体を起こすと、ことこが深刻そうな表情で私を見下ろしている。その後ろでは「ラ・ラ・クイーン」の紙袋を片手に提げたりとが、退屈げに壁に寄りかかっていた。

「りとも一緒？」

「うん、三人の話だから」

後ろに視線を向けると、ことこの代わりにりとがそう答える。三人の話、だなんて随分と仰々しい。

「どうしたの？ そんなに改まっちゃって。クラゲフェアなら順調に進んでるわよ」

「えっとね、お店の話じゃなくて……」

「分かったわ。ベースメントで話しましょ」

なによ、軽い冗談じゃない。何だかはつきりしないことこの態度に、少しイライラした。

カウンターを整理してからレジに鍵を掛ける。ひっくり返された「本日の営業は終了しました」の札が、射込んだ夕日の光を反射してよく輝いていた。

3

「りとちゃんと、まりちゃんと、三人で付き合いたいのに」

＊

確かに、PARKは三人揃ってこそ今までやってこれた。だから、私たちの危機は、私自身の危機でもある。当たり前だけど、それってすごく厄介なことよ。

には分らない。

ことが持ち込んできた「提案」は、思っていたよりもずっと大きくて、それでいてすぐに解決しなきゃならぬ難題だったらしい。まるで、砂浜に打ち上げられたクジラみたいだね。

「私、三人が離れ離れになるのだけは絶対に嫌なの。りとちゃんは？ そう思うよね？」

「うん。離れるのは、違うと思う。でも、ことこ——」
必死に説明することこの横で、りとが平気な顔で座っているのがどうしようもなく嫌になる。りとはそうやって、いつも余裕そうにしているから。

まるで、全部が他人事だともいうようにして。

前にも——もちろん、バブルドームの外に出たことが防衛隊にバレた時に——こういうことがあった。防衛隊に拘束されてから、ことが泣きそうな顔でPARKが無くなるかとも言出したのを思い出す。

「ねえ、まりちゃんは？ どう思う？」

身を乗り出して私に尋ねることこは、私がことこの話を理解してるかは全く気にしていないみたいだった。好

「だからね、まりちゃん、りとちゃん。私は三人で、私たちで、もっとPARKをやっていききたいの」

テーブルを挟んで私と向き合うことこは、いつになく真剣な表情で私を見つめている。

「ねえ、ことこ。一体、何を言ってるの？」

いつものことだけど、ことこの説明は飛躍しすぎていてついていけない。彼女の頭ではすっかりできあがったお話も、要点を散らかしちゃったら台無しだ。

「ずっと、三人一緒がいいの。離れたくないの」

「それは分かったわ。でも、もっと根本的に……」

「すごく変なことを言ってるのは分かってる。でも、それを私たちの『普通』にしていきたいの。私たちには私たちのやり方があるし、少しずつ探せばいいはずだから」

「ことこ。それじゃ分からないわ」

「う……ごめん……」

ちよっと落ち着いてよね。早口のことこって、面白いけど疲れるわ。

ことこは「もっと先に進みたい」って言っていた。でも、私たちがこれ以上どこに行けばいいのかなんて、私

きなこと、大事なこと、目の前の危険……考えすぎて周りが見えなくなるのって、ことこの悪いくせだわ。

「ことこ。もっとちゃんと言わないと、分からないよ？」
りとも合わせて立ち上がって、その隣でことこをなだめている。ことこは肩を撫でられて少し落ち着いたらしく、身体をソファに戻して深呼吸をした。

「そうね、ことこ。全然話が見えないわ」

「違いの。私、ただ三人でずっと仲良くしたいだけで……」
やっぱりだめみたいね。

「それは分かったわ。でも、どうして今さらそんなことを言い出すの？ ね、ほら、りとだって——」

「——りとちゃんにはもう、話したの」

ことこが私の言葉を遮る。

それを聞いてりとに視線を向けると、りとはそれに気付いたようにふいと目を逸らした。いなすような動きに、頭がかっと熱くなる。

ことこはそんな視線のやり取りに気付かず話し続けているけれど、そんな忙しない声も急に耳に入らなくなった。なによ、なによ。ちくちくと、心に嫌な刺激が走る。ガ

ラステープルの冷たい距離感が、りと向き合うこの構図が、二人と私を遠く隔てる壁に感じられた。

二人でそこそ私に隠れて何かをしているんじゃないかって、そんな根拠のない妄想が浮かんでは消えていく。私だって別に意地悪を言いたいわけじゃない。落ち着いて話したいのに、感情が前に出てくるのを止められない。私が放った言葉でことが落ち込んでるのも知っている。りとがあんまり大事なことを言ってくれないのも、慣れてきたつもりだ。

でも、私じゃだめなの？ 私はやっぱ仲間外れなの？

「なによ。知らないのは私だけだっていうの？」

「そ、そうじゃないよ。ただ、まりちゃんにはしっかり伝えなかったから、まずりとちゃんに相談しようと思って」「だって、そうじゃない。今日だって私抜きで、そこそこお出かけ？ とっても、楽しそうだわ！」

ばかみたい、ばかみたい。隠し事ばかりだ。

「違う、違うの。まりちゃん、ちゃんと聞いて？」

ことこのはつきりしない様子にイライラする。

「ずっと聞いているわ！ 何が違うのかは全然分からない

けどね！」

そう言いながら思わず立ち上がろうとしたけれど、急な動きに立ちくらんで足がふらりと揺れてしまう。

そんな私を見て立ち上がるりと「まり、危ない！」という声さえ嫌になって、私はぐっと床を踏みしめた。

「ああ、本当に嫌だわ！ 目の前が真っ暗になったみたい」

「まり、落ち着いて。ことも」

「りともりとよ。これは三人のことじゃない。どうしてそんなに平気でいられるのよ？」

私を言いくるめようとするりと、指をさす。

こんなの、落ち着いていられる方が狂ってるわ。狂ってるのはりの方よ。なんでも知ってるようなその顔は、PARKの行く末などどこ吹く風とでも言いたげだ。

「だって、慌てたってどうにもならないよ」

「だからって、落ち着いていられる？ もし、りとが仲間外れにされてもそんな顔できるの？」

「うん。三人なら、きつと大丈夫だよ。ことこだって口下手だけどちゃんと考えてるし、まりも落ち着いて」

「あー……もういい。分かったわ。りと、結局あんたはP

ARKなんてどうでもいいのよ」

「そんなことないって。まり、ちょっと変だよ？」

「変なのはりとよ！ もっと真面目に考えたらどう？ りとって、いつもそうやって——んむっ！」

衝撃に目を瞑る。とうとう怒ったりとが飛びかかってきたのかも、と思いながらそっと目を開けた時、私の反論は文字通り塞がれていた。

「——！」

ラブファイターシュガースターでも、こんなシーンがあった気がするわ。頭の中に少し残った冷静な部分で、ふとそんなことを考えていた。

「ん……っ」

「ちょ、ちょっと……りとちゃん！」

あの時、ことが渋谷で見つけた魔法のステッキは確かに貴重な「おたから」だったけど、ことこはどうしてあんなに執着したのかしら？ あれを捨てて逃げていたら、私たちは今頃——

「——ぷはっ。げほ、げほっ！」

「落ち着いた、まり？」

りとが私から離れると同時に、こらえていた私の息が一気に流れ出す。ソファに倒れ込むように座り込んだ私には、何が起きたのか理解できなかった。

「り、りとちゃん。——」

「——、ことも、——？」

「で、でも……まだ——、だから」

頭の隅で二人の意味ありげな会話が通り過ぎていったけど、それを処理するには流れ込む情報が多すぎる。

怒りの熱さがぐるぐると頭を回っているところに、りとが流し込んできたものが加わってさらに顔を熱くした。私にはどうにもならない奔流が、私の中を駆けていく。

「な、なにを、したのよ……ねえ、りと、おかしいわ……」

「まり、覚えてる？ 私としたこと」

立ち上がったままのりとを下から睨みつけると、りとはなおも穏やかな表情で私を見下ろしていた。

覚えてると訊かれて思い当たるのは、最近よく見る変な夢のことだ。まさか、あれが全部……

「夢じゃなかったっていうの？」

囁くような優しい声、耳にかかる息、柔らかい肌が擦れ

るむずむずとした感覚。まるで恋人同士がするようなそのじゃれあいを、私はずっと夢だと決めつけていた。でも、私が覚えていないだけで——例えば、私がお酒を飲んでいたとしたら？

「そうだよ、まり。私たち、まりを仲間外れになんてしないよ。だから落ち着いて」

「……なによ、それ」

最近の違和感の正体がずっと落ちて、代わりにその現実に対する拒否感が胸を覆っていく。私の大事なところ、りとに台無しにされたこと。あまつさえ、私にそんなイベントの記憶が残っていないこと。そして、この胸が苦しい感覚をりと自身には分かってもらえていないこと。抱えきれない現実が、私に襲いかかってくる。

「なんなのよ。あんたたち……」

気付くと、私の目から大粒の涙が流れていた。泣くつもりなんて、なかったのに。

「ま、まりちゃん……」

「そっか。私のこと、二人で笑ってたんだ」

「笑ってなんてないよ！ 私、ただ……」

私たちの現実、バブルドームの中にある。私たちはここから逃げられない。私の生活の果てはここにある。くれんぼには狭いくらいの空間が、私の生活の全て。

バブルドームの端っこに来たところで、何からも逃られないのは分かっている。いずれ、二人が私を見つけるだろう。でも今は、汗と涙でぼろぼろになったひどい顔を、誰にも見せたくなかった。

「私だけ？ 知らなかったのは、私だけなの……？」

空を見上げると、ドーム越しのぼんやりとした夕暮れが顔を照らす。散りばめられた色とりどりの装飾が、まるで星空のように私を覆っている。

バブルドームに差す星の光が緑・赤・青……ひとしきりゆらめいて、目尻から流れた涙が地面に落ちていく。スクーパーズが襲来してから、こんなに泣いたことってあったかしら。

世界が壊れて、家族と離れて、壊れそうな心に甘い結晶を振りかける。砂糖漬けになった心が湿って、乾いて、その繰り返し。壊れゆく世界の中で、心が少しずつ固いもので覆われていく。

「三人でPARK？ ことこ、よくも私の前で、そんなこと言ってくれたわね」

ことこは名前を呼ばれると身体をびくつと震わせて、それきり黙ってしまった。後ろめたいことがあるから、そうやってびくびくしてるに決まっている。

二人でグルになって私を陥れようだなんて！

「もういいわ。二人で仲良くやればいいじゃない。PARKなんて、もうおしまいよ！」

駆け出した私は誰にも止められない。「まりちゃん、待って！」と叫ぶ声も、ずっと遠くに離れていく。いくら走っても足りる気がしなかった。

このまま、バブルドームを抜け出して世界の果てまで逃げられればいいのに。りとも、ことこもない場所に。

*

「はあ、はあ……」

荒い息を整えながら、バブルドームの冷たい壁に寄りかかった。半透明の無機質な硬さが、逃げられない現実を思い出させる。

それが簡単に叩き壊されて、こんな風に自分のことで泣ける日が来るなんて。

「バカみたい……バカみたい！」

私が川崎を離れてすぐ——ことこが原宿に移住してくる前——PARKにはりとと私しかいなかった。とはいえ、二人で暮らしていたのはほんの数週間だけだったし、今となってはもうずっと昔の話だけど。

初対面のりとが、最低限の家事分担を済ませてから、そのまま黙ってベースメントで荷解きを始めてしまったのを思い出す。これから一緒に暮らすのに、私とおしゃべりする気もないなんて、口数が少ない変な子だと思ったものだ。

かと言って、自己主張ができないというわけでもなく、ふとしたきっかけで言い合いになったりもした。りとの冷めた視線に腹を立てたこともあったけど、しばらく一緒に過ごして、結局のところ周りに興味がなかったと気付いたのだった。

それから、ことこがPARKに移住してきたのだ。ことこは明るくって、りとも臆せず甘えていくし、私の

話し相手としても不足ない。ことごと一緒に暮らし始めてから、二人よりも三人の方が上手くやっていける、という確かな実感があった。

一人でいるのが好きなりと、明るくて元気なことこ、そしておしゃべりな私。性格が違う三人だけど、PARKをやっていく上ではそれもいいスパイスだと思っていた。だから、それなりに上手くやってこれた……はずなのに。「りとしてば、何を考えてるのよ……」

別に、私に隠れてりとがことごと仲良くしていたって構わない。ことこなら、きっと私よりもりとと上手くやっていけるのかもしれない。

でも、こんなつてある？ 二人で暮らしたいなら、二人で勝手にすればいいじゃない！ 何も言わないで、私を傷つけてまで追い出そうっていうの？

「これから、どうすればいいのかしら」

夕日が沈んで、ドームに貼り付いた装飾もすっかり暗くなった。蒸し暑い空気だけが残されて、気だるさと一緒に身体を包み込んでいく。

バブルを通して見る星のきらめきは、とても弱々しく

緊張と安堵で心臓がばくばく言っているのが分かる。生命の危険は過ぎ去ったけど、薄暗い闇の中から浮かび上がる聞き慣れた声に、むしろその鼓動は一層高まっていた。

「……あら、りと。早かったわね」

私はその動揺を知られないように、寄りかかった身体をゆっくりと起こしてりとに歩み寄った。背中に回したぎよにそライフルには、予備のソーセージがいっぱいに詰められている。

「何も持たないで出ていったから、心配したよ」

「そう？ 敵なんか、一体も来なかったわ」

りとがスケボーを蹴り上げて、アスファルトと一緒に小気味いい音を立てる。スピード重視の小さなエンジン付きスケボーのデッキテープが目に入って、隠したはずの涙がじわじわと視界を歪めた。

「帰ろう、まり。ことこも心配してるよ」

「なによ、今さら。PARKはおしまい、これでいい？」

「おしまいじゃないよ。早く帰ろう？」

私に向けられたりとの目は、やっぱり慌てているようにも怒っているようにも見えない。スケボーで駆け回っ

て頼りない。ドームの夜はとても暗いから、安心して出歩けるのは明るいストリートくらいだろう。武器もなしにこんなドームの端に来るなんて、度胸試しもいいところだ。

りとと一緒に出歩くことはあったけど、その時もスケボーと武器の準備は万端だったし。

でも、りとはもう頼れない。大きなスケボーに二人乗りで夜闇を駆けたのも、物陰に潜むスクーパーを退治して回ったのも、もう昔のことだ。今ここでスクーパーズが現れても、もう私にはどうしようもない。

もう、どうなったっていい。そう思いながら顔を上げると、狭い路地から影が飛び出してくるのが目に入った。とっさに体勢を整えようにも、どうにも身体に力が入らない。現れたのは、ギャングかスクーパーズか、いや、もしかしたら――

「……！」

「まり。ここにいたんだ」

この声は、りとだ。さっと飛び出した影は、スケボーに乗ったりとだった。

たせいで息は乱れているみたいだけど、今はそれすら気に食わなかった。

「おしまいよ。私がいなくなればいいんでしょう？」

「三人じゃないと、PARKはやっていけないよ」

「ちょっと待ってよ。りと、あんたがそれを言うの？ 私たちをぶち壊した、あんたが？」

「ぶち壊してなんか、ないってば」

りととの返答がぶっきらぼうになって、怒り始めているのが分かる。けんかの始まりはいつもこうだ。りととの感情を逆撫でするような言葉ばかりが口から出ていって、止められない。

ことこがいなかったら、こうやってけんかばかり。

ねえ、ことこがいたら。

「大体、ことこはりとのことが好きなんでしょ？ ことこも可哀想よね。好きな子が他の子にちょっかいを出す軽い子だったなんて！」

「まり！ 流石にそれは言いすぎだよ」

りととの語気が強くなって、ちかちかとした感覚が蘇る。ワインを詰めた水鉄砲を携帯していたら、きっとまた大

爆発していたところだ。

「じゃあ、何？ りとは本気で私が好きだっていうの？」

「好きだよ。好きだけど、だから何なの？」

「な、何って……そんなにはっきり言わないでよ！」

りとを責めるつもりで放った言葉だったから、ストレートな答えに面食らってしまう。

「……ごめん。今、すっごくいらいらしてるから」

「あら、奇遇ね。私もよ！」

りとの不機嫌そうな表情に應えるように、私はりとを睨みつけた。りとはそんな私の視線にも動じる様子はなく、面倒そうに溜息を吐く。

ヒートアップしかけた二人の間に、少しの沈黙が流れた。

「じゃあ、ことはどうするのよ」

「どうもしないよ。ことだって、まりが好きって言うてたじゃない」

「何それ？ 意味不明すぎ」

ことはりとが好きで、りとと一緒にになって私を陥れようとした。でも実は、当のことは私のことが好きで、りとも私が好きだったの？

そんなの、めちゃくちゃだ。

もちろん私だってことは嫌いじゃないし、りとのことだって……りとのことだって、たぶん、好きだ。あんな乱暴をされていたと知る前は、りを見てドキドキしたこともあった。今だって——いや、今はもう、ドキドキなんてしないけど！

ことこみに分かりやすい可愛らしさは少なくとも、りとがすごく魅力的な女の子だってことは、私が一番よく分かっているつもりだった。

「ねえ、そんなおかしいことってある？ りとは変だと思わないの？」

だからこそ、あんなおかしいことをして、あんなおかしい告白を受け入れさせようとするりとに腹が立っていた。

「変じゃない。ことこなりの告白だよ」

「変よ。そもそも、告白は二人でするものだわ」

三人でする告白なんて、ふざけてる。大事な気持ちのやり取りは二人でするものだ。

誰と誰が好きとか、誰が何番目に好きとか、そういうのは恋の分からない小さい子がするから許されるのに。

「まり。常識に縛られないで。私たちは私たちなりに考えてやっていこうよ」

「常識？ バカ言わないで」

みんながお互い好き同士で、それをはっきりさせないのが「私たちらしい」ですって？ 常識なら何でも無視すればいいってもんじゃないわ。

でも、何より気に食わないのは、二人がその「常識に縛られない考え方」を共有できているってことだ。二人だけが分かり合っている雰囲気も、私がないがしろにされてるみたいでむしゃくしゃする。

「あんたたちは何にも分かってないわ。り、と、と、と、私が好きっていうのも、どうせ嘘なんでしょ？」

「——っ！ ま、まり！ いい加減にしてよ」

私の言葉に反応して、りとがみるみる怒っていくのが分かった。私を見上げるりとと視線が、静かに突き刺さる。そうやって、なかなか見えないうりととの感情が露わになると、穏やかな彼女の表情が崩れると、少しだけ安心した。でもそれは、同時に私をひどくイライラさせるのだ。「それはこっちのセリフよ！ 三人でとか好きだとか、そ

んな風に言いくるめれば私が落ち着くとも？」

「まりっていつもそうだよ。どうでもいいことばかり気にしてさ、肝心な時に——」

「ああ、もう！ あんたって本当に分かんないやつね！」

二人でこそこそしないで。私をちゃんと見て。私のこと、もっと大事に扱って！ もう止まらない。

言葉を遮って、私はりとに指を突きつけた。

「一応言っておくわ、りと。私はね、私が一番じゃなきゃイヤなの！ どんな時でもね！」

王子様が来てくれると思ってた。昔は……そうね、スクーパーズが来るまでは、ずっと。

お姫様が王子様と結ばれて幸せになる絵本もいっぱい読んだし、友達と理想の王子様の話をしたこともあった。忙しそうな両親は私の理想の将来とは違ったけど、ママは何かにつけて「素敵な王子様が迎えに来るわ」なんて私に言い聞かせていたものだ。

原宿に移住してからも、ママの言葉はぼんやりと私の思考を覆っていた。いつかスクーパーズが退治されて、みんなが自由に暮らせるようになったら、きっと。

きっと、どこからともなく王子様が現れて、私は花嫁になるの。丘の上の教会で、綺麗なドレスを着て、みんなが祝福してくれるの。

「だから、私の夢を笑わないでよ……りと……」

だからこそ、りとの言う「私たちらしさ」には納得できなかった。私の夢を笑われているみたいで腹が立った。

「絶対に笑わないよ。まり、だから泣かないで」

「——っ、触らないで！ ほっとしてよ」

りとが私の頬に触れる感触で、自分が涙を流しながら喚いていたことに気付く。

涙って、こんなに出るんだ。そんなことを意識してしまうと、さらに涙が溢れ出してくる。声を上げて泣くなんて、恥ずかしい。見られたくない。

でも、声が抑えられなくなる。

「私……うん、私たちはまりの夢を笑ったりしないよ」

しゃがみこんだ私の頭を、りとの手が押さえるように撫でつける。上から聞こえてくるりとの優しい声は、嘘を吐いているように思えなかった。

「じゃあ、りとは、私の王子様になってくれるの？」

までとは違う関係で、今まで通り三人で。

「結局、みんな離れ離れになっちゃうのが怖いのかも」

「それは……そうだけど」

今、私が勢いに任せてPARKから去ったとして、明日から生き延びることが出来るかは分からない。このままじゃ原宿で夜を凌ぐのもままならないし、バブルの外ならなおさらだ。

ことこには思わずあんなことを言ってしまったけど、三人でPARKをやっていたみたい、やっていたくしかないという気持ちも当然分かっていった。

「私は、まりの花婿姿も見てみたいよ？」

そう言っ、りとが私に手を差し伸べる。

そんな優しさに素直に応えるのも恥ずかしくて、私はりとの顔を見ないようにその手をとって立ち上がった。

「なんて最悪なプロポーズなのかしら。りとならいいけど」

「でも、ほんとの気持ちだよ？」

「私は、誰かの代わりになったりしないわ」

「ことこの代わりなんかじゃない。私たちは、誰が誰の代わりにもならないよ」

「うん。でも、私だけじゃなくて、ことこも王子様だよ」

「……私の王子様は、二人もいないわ」

私は思わず顔を上げる。私を見下ろすりと、目が合っ、そのまま。

「いるよ。私たち、三人だもん。まりだって、王子様になっ、いいんだよ」

「ばかみたい。ことこの受け売り？」

「違うよ。私なりの解釈っていうか……ことこも、あんまり分かってないみたい」

それから、りとはことこの「提案」について、改めて彼女なりの解釈を加えながら教えてくれた。

一対一で付き合う関係が絶対じゃないこと。みんなが納得すれば、何人で付き合っても誠実だってこと。そういうお付き合いについて、昔の人も悩んでいたこと。

それが、ことこの考えている未来に一番近いってこと。

王子様が二人もいたら、きっとけんかになってしまいうだろう。でも、それがりとことこなら？ 二人が王子様だったなら、私を奪い合うのかしら？

それとも、三人で上手くやっていけるのかしら？ 今

そんなこと、言われなくなっ、分かってる。でも、みんなが花嫁だとか、みんなが花婿だとか、そんな理想論が簡単に実現できるようにも思えなかった。

「ねえ、私たち、これまで三人でいっぱい色んなことをしてきたわ」

続きを促すように、りとが頷く。

「でも、今回ばかりはすごく不安なの。PARKがだめになっ、しまわなかつて」

「私たちなら大丈夫だよ。ことこもいるし、私もいるから」

「ええ、そうよね……それは、分かっているけど」

バブルの近くの探検も、ずっと遠くの探索も、危険は色々あったけどなんとか生き延びてきた。PARKだって、三人でいつもベストなものを作り上げてきたつもりだ。りとことこがいれば、このめちゃくちゃな世界の中でも生きていける気がしていた。

だから、きっと。

私にできるかしら。口の中からそんな言葉が出そうになったけど、いつの間にか溶けて消えていた。

「分かったわ。ちょっとだけ、私たちなりの『非常識』を

やってみましょ」

王子様が二人いるのも、悪くないかもね。私がそう言うのと、りとは「まり、ありがと」と小さく笑いかけた。

「ま、楽しくなかったらすぐやめるけどね」

「うん、それがいいよ」

たんっ、と軽やかにシューズを鳴らしたりとが、ずっと抱えていたスケボーを地面に下ろす。辺りはすっかり暗くなっていた。もう帰らなきゃ。

これからの私たちがどうなるのかは分からないけど、今はただ、PARKに戻ってゆっくりしたかった。

＊

PARKへの帰り道。りとが構えたぎよにそライフルが、歩くたびにかちやかちやと音を立てる。私はその陣形に収まるように、スケボーの後ろをついて歩いていた。「ねえ、りとしてほんとに私のこと好きなの？」

「好きだよ。さっき言ったじゃん」

「あら、そう」

りとが私を好きだなんて、思ってもいなかった。性格

な場所なのに、武器も持っていかなかったよね」

「どうにもできないのは、りとも分かっているでしょ？ PARKを飛び出した時は、もうどうなってもいいって思ってたくらいよ」

「ふーん……そっか」

答えを聞いたりとは、私をじっと見つめてから、不機嫌そうに首を横に振る。そして、とうとうため息を吐いた。

「まりのそういうとこ、やっぱり嫌かも」

「は、はあ？ さっきは好きって言ってたじゃない！」

「……あー、うん。ちゃんと好きだよ、好き好き」

面倒そうに答えるりとは、あしらうようにくるりと背中を向けて歩き始めた。

「ちょっと、待ちなさいよ。……何なのよ、もう！」

すたすたと歩くりとの横に並ぶ。私を流れる夏の空気が、いつもよりすがしかった。

も全然違うし、何かあるとすぐけんかになっていたから。ここがいなかったら、二人の共同生活は一年と待たずして解消されていたことだろう。

もしかして、私が好きでちょっかいをかけていたのかしら？ りとも可愛いとこあるじゃない。

でも、どうしてあんなにはっきり告白したのに、私の前で平気でいられるのかしら。その余裕さは、やっぱり気に入らなかった。

「もしかして……一緒に風呂に入ってる時とかも、私のこと気になってたの？」

「んー、そんなことないよ。ことこもいるし」

好きな子のあれもない姿なのに……とは思ったけど、確かにそうかもしれない。シャンプーハットを装着して頭を洗うことを見ていると、まるで家族で風呂に入っているような気分になるし。

「あつ、そうだ。まり」

私がひとしきり、との言葉を引き出し終わったところで、今度はりとが振り向いて私に呼びかける。

「私が来なかったらどうする気だったの？ こんな危険

4

ベースメントに戻ると、さっきまで三人で掛けていたソファの端で、ここが子供みたいに泣きじゃくっていた。薄暗い部屋の中で、ガラステーブルの周りだけが明るく照らされている。ここはその光から逃げるように、上からタオルケットを被って小さくうずくまっていた。

「……っ、うあ……りとちゃん、まりちゃん……」

ひくひくと苦しうに息を吸うことが、細かく肩を震わせる。呼吸さえもままならないその姿は、触ったら壊れてしまいそうなほどに弱々しい。そんなことを見ていたせいか、また涙がじわりとこみ上げてきて、私は拳をぐつと握りしめた。

ここがこんなに泣いているのは初めてだ。PARKを失いかけた時、りとが行方不明になった時、私がここに言い過ぎちゃった時……色々あったけど、今までのことこなら、歯を食いしばってどうにか泣かないようにしていたから。

だからこそ、なおさら今が私たちにとって大事なタイ

ミングなんだと意識する。

「ことこ、ただいま。まりも帰ってきたよ」

りとはそう呼びかけると、まるで自分の役割を終えた
とでもいうように、そのまま座り込んでスケボーの手入
れを始めてしまった。

「ちょっと、りと……」

小声で呼びつけると、りとは私を見上げてにへらと笑
う。ことこのことは、私に任せるつもりらしい。

こういう時って、普通は三人で反省会でもするんじや
ないの？ そんなにのびのびしてると、逆に感心しちや
うわ！

「その……ことこ、悪かったわね」

スケボーのウィールをくるくる回してオイルを差す
りとを尻目に見ながら、ことこの揺れる背中に向かって呼
びかける。帰ってからのことはりと、が取り持ってくれる
とばかり思っていたから、最低限の言葉しか出てこない。

ことこは私たちが帰ってきたのに気付くと、振り向い
て涙でいっぱい顔をこちらに向けた。ぼさりと青色の
帽子が落ちて、びしょ濡れの瞳が目に入る。

「冗談よ、冗談。もう分かったから、いいわ」

「そ、そうだよね！ 私、ちょっと焦ってるのかも」

分かってる。ことこはまだ冗談を言う余裕がなくて、今
は私がことこを元気づけなきゃいけない場面だってこと。
でも、こういう時にどうすればいいのかは、やっぱり分
からない。

いつまでもうじうじしてることも腹が立つけど、こ
んな時まで素直に謝れない自分にもイライラしていた。

「ね、ねえことこ……」

言葉が続かない。後ろからシューズを磨く音が聞こえ
てきて、次の言葉を急かされているような気分になる。沈
黙でいっぱいになったソファは、座っているだけで息苦
しい。

そんな重たい時間が流れてから、ことこが顔を上げた。

「でも、まりちゃんをだましたりとか、そんなことは絶
対にしないから。さっき三人で話したことは、絶対に冗
談じゃなくて……」

「分かってるわ。私たちは私たちなりに、でしょ？」

さっきまでけんかしていたりとの言葉を、今度はその

「ま、まりちゃん。あのね——っ！ こ、これは違うの」

それから、ことこは泣いているのを隠すように慌てて
目を拭いた。隣に座りながら「目が腫れるから拭いちゃ
だめよ」と諭すと、ことこは小さく頷く。

タオルケットから顔を離して私を見上げることこの顔
には、不安と焦燥が映っていた。

「ご、ごめんね。私、まりちゃんを傷つけちゃった……」

「どうしたのよ、ことこ。クラゲでも目に入った？」

「あ……そ、そうかも！ え、えへへ……」

ことこが弱々しい笑い声を上げる。無理に笑っている
様子は痛々しいけど、いつも明るいことがしおらしく
謝っているよりはずっとよかった。

「ことこの考えてること、りとに色々聞いたわ。ちゃん
と言ってくれなきゃ、分からないじゃない」

私がそう口をとがらせると、ことこは「ごめんね、まり
ちゃん」だなんて、また下を向いてしまう。

なによ、調子狂うわね。いつもみたいに冗談めかして
笑ってくればいいのに、これじゃまるで私が本当に怒っ
てるみたいじゃない。

まま繰り返す。初めに聞いた時はすぐ気に食わなかつ
たはずなのに、今はまるで自分の言葉のように口から出
ていた。

私の言葉を聞いたことこは、一瞬きょとんとして、そ
れから目を見開いた。そして、残った涙もそのままに、み
るみる明るい表情を取り戻していく。

「そ、そうなの！ 資料によると、昔から色んなお付き
合いの形が考えられてね、それを応用すれば、三人で
ずっと一緒にいられると思うんだ。だから——」

ことこが私の手をぎゅっと包み込んでぶんぶん揺ら
す。まるでことこの尻尾になったみたい。

私たちなりに。私たちなりの。私たちだからこそ。振り
返ってみると、PARKはずっとそうやって進んできた。
焦ってたのは、私の方なのかもしれない。

「ことこ。いっぺんに言われても分からないわよ」

「あっ……ごめん。えへへ……」

さっきとは違う、安心する笑い声。緩んだ両手から、こ
とこの安堵が伝わってくるようだ。

ことこの説明を聞いてみると、りとの話はほとんどこ

とこの受け売りだった。まあ、私の花婿姿を見てみたいっていうのは……そうね、りとのオリジナルらしいけど。私がりとに襲われているのを見てしまっただけから、ずっと悩んでいたみたい。それから一人で色んなことを調べたり、色んな本を読んだりして、何とか三人で上手くやっていく方法を探していたのだという。やっぱりことは、一人で悩んでいたのだ。

結局、りとが悪かったんじゃない！

「でね、まりちゃん。その……」

と、楽しそうに（ときどき真面目に）話し続けていたところが、突然言葉に詰まってしまふ。と同時に、こと、こと繋がったままの私の右手が、またきゅっと握り込まれた。ちら、と気付かれないようにここに視線を送る。ことこの目が泳ぐのに合わせて、ひんやりしていた両手が少しずつ温かくなって、私の体温より熱くなっていた。

「なあに？ はっきり言ってくれなきゃ分からないわ」

分からないなんて、嘘だ。今から何が始まるかなんてすっかり知っていたけど、知らないふりで焦らしてしまう。ことからじわじわ伝わる熱が、私を意地悪な気持ち

ちにさせていた。

うー、と小さく唸っていることこの顔を覗き込む。目が合うと、ことは小さく頷いた。

「まりちゃんとりとちゃんと、三人で付き合いたい。それじゃ……だめかなあ？」

そう言い終えてから、恥ずかしそうに下を向いてしまふ。ことは手をずっと強く握ったままで、身体を縮めるように腕を自分の方へきゅっと寄せた。

告白としては、ちょっとイマイチだ。私の理想の王子様は、こんなに自信なさげな告白なんてしないもの。

でも、こと、こらしい言葉だなんて思う。

「うーん、そうね……」

握った手を揺らしながら、考えるふり。ことこの微妙な不安につけこんで、仕上げのようにゆっくり焦らしてみせる。

「ま、いいわ。ことこの考え、もつと聞かせてよね」

「まりちゃん……！ 嬉しいよ！ え、えへへ……」

私の返事を聞いたことが、また顔を上げてぱっと明るい笑顔を見せる。さっきから忙しい子ね。

「期待してるわ、ことこ」

「うん！ 私、頑張るから」

ここ数週間の違和感がすっかり消えて、肩の荷が下りた気分だ。ほう、と軽く息をつく、いつもの調子が戻ってきた感じがする。

「ちょっと、りと！ あんたも、そろそろこっちに来たらどうなの？」

そう言いながら振り向くと、りともちょうどスケボアのメンテナンスを終えるところだった。赤いキャップのスプレー缶をしまい込むりとは、片付けの手を緩めずに顔を上げる。

「ふふっ……はいはい。まりは元気いっぱいだね。さっきまであんなに泣いてたのに」

「うるさいわね。もう誤解は解けたわよ。あんたこそ、ちゃんとことこの話を聞いたら？」

からかうような笑い声も、今は心地いい。ボタン、と工具箱が閉まる音が聞こえて、作業の終わりを告げる。

「私はもうお昼に告白されたもん。ね、ことこ？」

「う、うん……」

と、りとがソファに寄りかかって、後ろからことこの肩に腕を回す。こともそれに応えるようにして、私に重ねていた手の片方をりとに添えた。

りとがことこの頬に顔を寄せて囁いているのを見ると、まるで本当の恋人同士に見えてしまう。ちゃんとこと、こを真ん中にして三人で手を繋いでいるはずなのに、私だけがちょっと離れているような気持ち。

「なによ、やっぱり二人で楽しくやってたんじゃない」

「ま、まりちゃん……違うよお」

勝手な寂しさに身を任せて拗ねてみせると、慌てたことこがまた私の手を握ってくれる。振られたりとはことこの頭を撫でながら、今にも笑い出しそうな表情で私を見つめていた。

＊

ことこの告白が終わってから、りとも交えて三人で少しだけ真面目な話をした。並んで座るりとと私に向かい合うように、ことが座っている。

「——だから、まとめるとそんな感じ。だから、ちゃんと

お互いの予定を伝えあったり……とにかくコミュニケーションが大事なの」

「ちょっと待って。それって、今までと何が違うのよ？」

「えっと……意識、かなあ？」

「い、意識？」

ここまで、ここから示されたのはルールというよりマナーのようなことばかり。私たちが、私が、明日から何をすればいいのかも、どうすれば三人で付き合ったことになるのかも分からなかった。

でも、考えてみると、普通の恋人だって契約書を書いたりはしないし、ましてやどこかに登録を出したりはないのだ。結婚ですら、防衛隊の名簿課に届ける必要はなかった。

とはいえ、二人で付き合うのが当たり前だったから、私たちの新しい関係を確かにくれるものがないのは少し不安を感じる。新しいことは、やっぱり少しだけ怖かった。

「お互いにお互いが好きって信頼しあう、とか？」

「あら。私たち、ずっと信頼しあってるじゃない」

「それは、そうだけ……」

三人で、三人で……と構えていたから、意識だけ変われば解決、と言われても面食らってしまう。

「うーん……例えばね、まり」

言葉に詰まることに、りとが助け舟を出す。私の名前を呼んで立ち上がったりとが、ソファに回り込んで私の後ろに立った。

「こうやって、いきなりぎゅっとしてもいいんだよ」

「い、いきなり何よ？」

そして、後ろから私を包むように抱く。首元に感じるりと体温が——暑かしいはずなのに——ひんやりした心地よさを思わせる。

「んー？ まり、怖がってるみたいだから。ことこの言ってること、あんまり分かってないでしょ？」

髪と囁き声が擦れて耳がくすぐったい。思わず変な声が出そうになるけれど、こと、こと同じやり方で丸め込まれるのも、何だか気に食わなかった。

「あら、りとも分かってないんじゃないの？」

「ふふ。うん、そうかも。これから、私たちのスタイル見つけなきゃね？」

付き合うと言っても、私たちはあんまり変わらないんだと思う。明日からも、一緒に暮らして、一緒にPARK

をやっていくだけで。

でも、もっと素直になりたい。ちょっと大胆になりたい。こうやって背中に感じる熱を、ちゃんと受け入れられるように。

「あんまり気にしないでいいんだよ。昔の人とか、決まりきったルールとか、私たちには必要ない」

「それで、本当にやっていけるのかしら？」

「大丈夫だよ、まり。ことこもいるし。三人でやっていけばいいよ」

と、りとに合わせてテーブルの向こうに視線を送ると、どうもこと、こと視線が合わない。何だか私たちに見とれているみたいだ。少しして、やっと視線に気付いたことが私たちに手を振った。

「ことこ、のぼせちゃったの？」

「ううん、違うの。なんか幸せだなんて……あ、そうだ！」
ことこが突然、「いいこと」でも思いついたような表情で立ち上がる。

「新しいバスボム、ちょっと試してみない？」

クラゲフェアの在庫が入った箱を探し始めることこ。手のひらに乗せて見せてくれたのは、新作の青いバスボムだった。爽やかな水色にシーソルトとお肌いいオイルが添えられているらしい。

「ことこって、ほんと一緒に入りたがりやさんよね」

「だって久しぶりなんだもん、みんなでお風呂！」

皮肉で返しても、ことこは「えへへ」と笑うだけ。横を見ても、「うん。じゃあ、一緒に入ろっか」だなんて楽しそうだ。

もう！ りとったら、ことこには甘いんだから。

5

「やっぱり、私とお風呂でそんなこと考えてたのね！」
お風呂を上がってから、まりの機嫌がすこぶる悪い。どうしてだろうと考えてみたけど、おそらく、私とことこ、でまりにいたずらしたからだろう。

さっき、ちゃんと三人で付き合うって話もしたから、もう受け入れてくれるのかなって思ったんだけど。まりのことは、やっぱりよく分からない。

「もうまりは彼女だし、いいかなって」

「そ、そうだけど……でも、だめなものはだめ。ムードっものがあるでしょ？」

逃げるようにお風呂を去ったまりは、ヘアタオルにバスローブを身に着けて私たちを待ち構えていた。仁王立ちで怒っている姿には、いつもの可愛いバスローブは似合わない。

ちょっとえっちでやっぱり可愛く見えるその姿に、どうも気が抜けてしまう。でも、ここで「まりも流されてたじゃん」なんて言おうものなら、また家出なんてことにもなりかねないのは明白だった。

「私も、まりちゃんにすりすりしてみたんだ〜」

と、ことが後ろからまりの腰に抱きついた。久しぶりに三人でお風呂だったから、とっても楽しそう。

背中から伝わるその勢いに、まりもひるんでしまうけど、慌てて首を振って我に返った。

「からかうのはやめて。私は真面目に言ってるの」

こういう時のまりは、すぐく面倒だなんて思う。私はただ、したいようにしてるだけだから。

「……別にいいじゃん、キスくらい」

「あ、あんたね！ 私の大事な貞操を『別に』だなんて！」ぼそりと呟いた不満が、またまりの怒りを再燃させる。やっぱりまりは、お姫様なのだ。自分が一番で、いっぱいちやほやされたくて、どんな時でもエレガントにエスコートされたいお姫様。

でも私は、そんなまりの手助けをしたいわけじゃない。三人で助け合って生きていくために、「弱いまりを守ってあげる」つもりはなかった。

実のところ、私はあんまり王子様に向いてないのかも。

「それに、ことこには、む、む……胸まで触られるし！」

そんなことを考えている間にも、まりの強い口調は収まらず、いつの間にかことこに飛び火していた。

「ご、ごめんね、まりちゃん……嫌だった？」

「嫌じゃ、ないわ。でもね……嫌じゃないのが、なんか嫌なの。まるで私じゃないみたいで」

ことこは困った顔でまりを見上げたまま、腕は離さない。そういう甘え方に、まりは弱かった。

嫌じゃないけど、嫌。なんてお姫様らしい悩みだろう。まりは深刻そうにしているけど、私から見るとその悩みは小さなことと思えてしまう。

「うん。ごめんね、まり」

私もまりに抱きついて、そのままの姿勢で頭を撫でる。まりは一瞬泣きそうな顔になってから、ふいと目を逸らして頬を膨らませた。

「優しくして丸め込もうたって、そうは行かないから」

「でも、三人でやっていこうって言ったもん。まりのこ、ちゃんと考えるからさ。ほら、食事にしよ？」

テーブルに置かれたミックスサンドは、ことこの担当だ。まりは「ミックスサンドって、やっぱり嫌いよ」なんて不機嫌そうに溜息を吐きながら、バスローブのままソファに掛ける。

「今日はクラゲ入りなの！ コリコリしてて美味しいよ」

まりは「まあ、不味くはないけど」なんて呟きながらサンドイッチを口に運んでいく。バブル中を駆け回ったせ

いで、お腹はぺこぺこだったらしい。

そんなまりの姿を横目に見ながら、私もクラゲサンドにかぶりつく。イワシの匂いを流し込むように麦茶を飲み干すと、クラゲの香りと一緒に夏の味がした。

古びたミシン

まりがずっと使っている小型のミシン。本来はかなり頑丈な機種だが、とても古いのでここが定期的に修理しないと使えない。微妙な力の加減が必要で、特にりが使うとしばしば壊してしまう。

りとのリメイクポーチ

りとはいつも携帯しているまりの手作りポーチ。大掃除の時に見つかったりとの古着を加工して作られている。原宿の一般的な街歩きに必要なグッズの他に、おやつやぎょにそが入っている。

青いシャンプーハット

ここが毎日使っている青いシャンプーハット。何度か買い替えているが、毎回いつも子供用の小さなものを買っている。一度だけ卒業しようとしたことがあったが、結局失敗してしまった。

あとがき

片桐 天音

本書「Sugar Jelly」の発行には、非常に時間がかかってしまった。予告時期から見ても、またページ数¹から見ても、結果的に異常な発行時期となった。

それはなぜか、と考えた時に——いや、特に理由はないのだけれど——やはり、自分の中に眠るある種の締め切り駆動開発的マインドを意識せざるを得ない。

そもそも、本書はコミックマーケット94で発行されるはずだった。ただ、少なくともこの八月中旬²という締め切りは、回避することが難しく、かつ個人的な事情によって破られることとなった。

まず、この締め切りは九月末の発行に修正された。今の時点から見ると、この先送りが悪手だったと思う。

九月末というのは単に僕の夏季休業の終わりであり、何らかのイベントの裏付けがあるものではなかった。つまり、僕の中での取り決めでしかなかった。こういう締め切りは、しばしば後ろにズルズル延ばされてしまう。諸々の事情も解決したわけではなかった。

¹ 「廃墟 曖昧、私とあなた」と「ペパーミント・バスタイム」は「あまねけー」および「Yeuva」からの再録である。

² 実際に入稿するのは七月下旬から八月上旬である。

そのような個人的な範囲から出ない稚拙な修正が、結果的に本書の発行を遅らせてしまった。このできごとは、次回以降のスケジューリングに活かす必要があるだろう。

*

解釈という言葉がある。解釈という言葉自体は、文章や作品を読み取って理解する取り組みや、そこで得られた内容を指している。

一方で、その使われ方は多岐にわたる。非常に強い権威を与えているように見せかけて、その運用は非常に稚拙ということも多い。強い解釈とか解釈が深いという表現³は、このような詐欺的な活動の一助となる。

そういういわゆる深い解釈は、しばしば二次創作という形で表現される。作品の受信者が、そのまま新たな作品の発信者になるのである。

しかし、ここで大きな問題が残る。

二次創作というのは新たな物語であり、一つの道筋に従って展開される別個の世界である。ここでは、作者の

³ あるいは、それに対する弱い解釈とか浅い解釈という罵倒。

思考の経路や葛藤は整理され、ふつうは切り落とされている。作品から読み取れる内容だけでは（その他のメタデータ⁴なしには）、作者と自分の思考経路が一致しているかどうかを検証できない。

解釈は思考経路であり、思考経路は解釈である。少なくとも、結果である二次創作は、経路である解釈（を直接書きつけた文章）よりも検証の精度は低くなる。つまり、結果の提示は解釈の提示ではないし、結果の一致は解釈の一致ではない。

一方で、現実には、解釈の検証可能性を無視しつつ解釈を重視するネットワークがある。

そういう詐欺的ネットワークでは、「解釈が深いとエライ」というイデオロギーが深く根付いている。それなのに、解釈を重視しているはずの二次創作には解釈の解説文が添付されないし、またそうすることはナンセンスなのである。この構造上の空虚さが、ネットワークを強く守り抜いている。

⁴ 作者のツイート群やなかよしネットワークの情報があれば、解釈の一致または不一致を前提として開始できる。

二次創作に込められた解釈をありがたがるネットワークでは、「作品に込められた解釈を理解できないとすればあなたが悪いのだ」という構造がごく簡単に築かれている。創作物に込められた**不定形の解釈**を生み出した作者だけでなく、読者も利益を得ているのだ。ここで、解釈というのはネットワークを維持する燃料となり、あるいはイデオロギーを共有しない他者を排除する武器となる。

これは、空虚で強い表現を掛け声に使うことで、巨大なおみこしにアクセスできると言い換えることもできる。土着信仰を失ったお祭りは、ハロウィンを介して東京の一ヶ所に人を集めるだけでなく、このようにインターネットを介して人を接続するのだ。

人はもはや本来の意味での「解釈」を必要としないのに、他者の上に立つための武器としての「解釈」は未だに有効なのである。だが、それが流行というなら従うしかない。私自身は、そういう実態を伴わない空虚な解釈を重要視することはないけれども。

あなた方はあなた方がやりたいようにやればよい。いつでも、ただそれだけだ。

ここから「Sugar Jelly」の感想をお聞かせください！



または、<https://goo.gl/forms/9gC4Vsr9dDArWVdy2>

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

書名 Sugar Jelly
発行日 2019/01/19
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 文伸印刷株式会社 コミックモール事業部
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

この本は URAHARA と PARK Harajuku: Crisis Team!の非公式ファンブックです。これらの作品の公式設定を追加または削除したり、置き換えたりするものではありません。



変態美少女ふいろそふい。